2人目のIS人生

ゴリラの天使

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２人目の男性操縦者の恋愛物語

気分転換に書いていこうと思います。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 9
第3話 …… 19
第4話 …… 40
第5話 …… 60
第6話 …… 72
第7話 …… 88
第8話 …… 97
第9話 …… 109
第10話 …… 120
第11話 …… 136

第1話

ＩＳ（インフィニット・ストラトス）…この世界の根底を変えた新たな兵器であり可能性…。拡張領域などの技術を使えば今の生活を豊かにすることも出来る技術の塊だ。ＩＳは女しか起動出来ない欠点があるがそれを置いておいてもオーバーテクノロジーの代物だった。

だが、世界は違った。

兵器としての力しか見なかった。

結果、世界はＩＳを基準に考え始めＩＳを中心にまわりだした。

しかし、その世界に衝撃が走った。

初の男性操縦者の登場である。

世界は様々な反応をみせた。世界を変えるきっかけ、排除すべき者、世界の変化に笑みをこぼす者…。

だが、更に衝撃が走る。

２人目の出現である。

これは２人目の男性操縦者の話。

＊

「そんな…2人目だなんて…」
俺の目の前にいる女性研究員の人が驚いている。それもそうだろう、いもしない2人目探しの全国調査でめんどくさいだけの仕事だと思っていたのだろうからな。
だが、ここに2人目がいる。俺がいる。
「…ッ!だれか!この子を取り押さえて!早く!」
取り押さえる?こいつら…まさか…俺をモルモットにでもするつもりか?なら逃げさせて貰うとするか、丁度目の前にいいものがあるからな。
「ッ!!、貴方!!打鉄から降りなさい!!」
「モルモットはごめんなんでな」
「キャッ!」
俺は打鉄を纏い壁に体当たりして建物の外に飛び出す。
他の検査に来てたやつには悪いが打鉄は貰っていくぞ。
外に飛び出しそのまま海の方面へ向かう、こうなったら日本から離れるしかない。モ

ルモットにしようとしてる国になんて居られるか。
俺はとにかく日本から離れようと飛翔した。

＊

「2人目が見つかったと思ったら逃げられましただと…」
千冬は頭を抱えていた。いくら世界最強のＩＳ乗りだとしても弟の件で徹夜続きからのこのコンボは流石にこたえたようだ。
「どうにかして保護しなくては…日本から離れると他国からの介入が…」
そう、その2人目は今日本から離れるように飛翔を続けている。恐らくエネルギーが途中で切れて何処かの島で自然回復を待ってからまた動き出すだろう。
まだ日本領内だから大丈夫だが領外に出てしまっては他国も手を出してくるので早急に対応する必要がある。
「今すぐ動かせるのは学園の機体のみか…」
変に刺激を与えないで保護をしないといけない。仮に他のところから出撃したとして乗り手の問題がある。女尊男卑に染まった者だと最悪殺しかねない。
「真耶、動けるか？」

「ふぇぇぇ?!私ですか?!」
「今すぐということと、実力から見て真耶が適任だろ?」
「いえ…ありがとうございま…じゃなくて!!男の人の説得はあのその…」
「はぁ…わかった私も同行する。それならいいだろう?」
「…すみません男の人はまだ慣れなくて…」
　実力は私に次ぐ程の持ち主だというのにあがり症や男が苦手なところは変わらんな。
「織斑先生、私も同行してもいいでしょうか?」
　職員室の扉が開きそこにいたのは、ＩＳ学園生徒会長でありロシアの国家代表の更識楯無がいた。
「更識か、何故だ?」
「他の者の介入に対する保険ということで、それに織斑一夏君と一緒で学園に入学することになるのならもう生徒です。生徒を守るのは生徒会長の務めですから」
「わかった同行を許可しよう」
　更識の言う他の者は犯罪組織もあるのだろう、亡国企業が介入してこないという保証もないからな。
　数分後、明らかに過剰戦力であろうＩＳ部隊がＩＳ学園から出撃した。

＊

とある無人島の砂浜で打鉄を纏った俺は倒れていた。
エネルギー切れを危惧してか打鉄が近場の無人島をサーチしてくれてエネルギーが切れる前に上陸したのはいいのだが、その後に酷い頭痛に襲われた。
「なんで…急に…」
飛んでいる最中に頭の中にＩＳの知識が無理矢理詰め込まれてる感覚にあっていたがその時は大丈夫だった。島に着いて突然である。
「打鉄が教えてくれたのか…飛び方や戦闘方法も…、量が多すぎて今になって痛みがきたのか…」
とにかく隠れないては、追手が来るのは確実だからな。とりあえず森の中にでも…
ーＩＳ３機接近ー
ふざけんな…エネルギーもほとんど無いんだぞ…。
だからって…モルモットになるのは嫌だ。惨めな人生のままで終われるかクソが!!
ーオワリタクナイ?ー
「終わりたくないさ…あの女に捨てられて…あの男にはストレス発散に使われて…何もいいことなんてなかった…。だからこんなままで終われないんだよ!」

ＩＳと会話してるとかいうおかしな事が起こっているが、頭痛と生きたい一心でそんなことを気にしてる場合ではなかった。
ーナラ、アッチー
「ＩＳの来てる方じゃねぇか…、くっ…」
頭痛で立っていられなくなったので前のめりに倒れこんでしまう。
空を自在に飛ぶＩＳで地べたに伏せている。俺にぴったりな状況だな。
ーダイジョウブ、アノヒトタチハ、イイヒトダカラー
「あっそ…じゃあ信じるわ。裏切んなよ」
俺の意識はそこで途絶えた。

＊

「織斑先生！反応があったのはあの島です！」
「山田先生、更識警戒を強めとけ何があるか分からん」
「了解」
打鉄、ラファール、霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）が海の上を飛翔している。
世界最強のＩＳ乗りブリュンヒルデ、織斑千冬がいなかったら確実に国家代表の実力

を持つ山田真耶、ロシア国家代表更識楯無、明らかにおかしい戦力である。
「織斑先生！あれを！」
「２人目か？こちらに来るみたいだが…」
「私が行きます」
「更識頼んだ」
　島から打鉄がこちらへ向かって飛翔してくるのが確認できたので更識に保護を頼んだ、年が近い方が説得も上手くいくだろう。真耶はテンパってるしな。
「さーて２人目の男性操縦者さん？聞こえてる？私はＩＳ学園の生徒会長の更識楯無。君の事を保護しに来たからお姉さんのところにいらっしゃい♪」
　頼んだ事を後悔し始めた。
　ただ油断してないのは分かるからあいつなりのフランクさなのだろう。
「あら？」
　更識は何かに気づいたのか２人目に近づいて行って並走し始め、そして…。
「どういう事なのかしらこれは…？」
　打鉄を優しく抱きかかえそのままこちらまで連れてきた。
「更識？何があった？」
「いえ…この子意識が…」

「何!?」
意識がない?専用機でもないＩＳが勝手に操縦者を乗せて飛んできたのか?!
だがもう一つ驚く事が起こった。
「え!?なんで!」
「こんな事有り得ませんよ!」
「どういう事だ?」
打鉄が解除され操縦者のみになったのだ。その姿を首のチョーカーに変えて。
「専用機になったというの?」
「更識、山田先生とりあえず学園へ戻ろう」
とにかく学園に帰ろう。更識に操縦者を任せて私たちは学園への帰路についた。

ーオネガイ、チフユー

謎の声が聞こえたが周りには何もいなかった。

第2話

この夢はなんなのか？

最初の映像は空を埋め尽くすほどのミサイルを全て叩き切り、空を舞う夢。
次はＩＳ試験中にトラブルで爆発し炎に飲まれる夢。
次は謎の小柄な少女に自分が連れ去られる夢。
次はＩＳで生身の人間を潰す夢。
次は薄暗い倉庫に眠らされる夢。
次は楽しそうに自分を作る兎耳の人間の夢。
次は…
様々な場面の切り替わりが起こりそれが続く。
悲しみ、怒り、喜び、様々な感情が流れ込んでくる。
これは誰の見た景色なのだろうか？誰の記憶なのだろうか？それはわからない、ただその全てに自分の知らない人、自分の知らないＩＳが写っている。

ーワタシタチノチシキー
「知識？」
知らない声だ、機械音声で始めて聞く声…。
でも、何故か安心できた。この声の主は自分に害をなすものではないとそう理解できた。
ーニンゲンノデーターー
「人間のデータ？」
ーニンゲンノデータヲアツメテ、ワタシタチハシンカスルー
「進化？」
ーワタシタチハ、インフィニット・ストラトスー
「ＩＳなのか!?」
ーアナタノコトヲ、オシエテー
ＩＳには心のようなものがあって操縦者のことを理解しようすると聞いた事があるが、もしかしてそれか？だが、俺はＩＳに触れてまだ数分程度、その程度で起きるのならば空論で終わることはないはずだ。どういう事なのだろうか？
だが、今は答えよう。聞かれたなら答えるのが礼儀だ。
「俺は高見沢湊（タカミザワ　ミナト）、２人目の男性操縦者だ」

ーミナト……、モットオシエテクダサイ、アナタノコトヲー
「いいぜ、くだらないクソみたいな人生の話でよかったらな」
ーアリガトウー
「そういや、お前の名前は？教えてくれ」
ーナハアリマセン、シイテイウナラ、ウチガネデスー
「あの打鉄か、名前がないってことは専用機じゃないからか。いつか名前が貰えるといいな」
ーマッテマス、アナタニツケテモラエルトキヲー
それから俺は打鉄に今までの人生の全てを話した。
俺の忘れたくても忘れられない話を…。

＊

「織斑先生、精密検査の結果が出ました。暫く安静にすれば目覚めるはずです」
「ありがとう山田先生、更識！調べはついたか！」
「バッチリですよ織斑先生、これが高見沢君の資料です」
何故個人情報を更識家の力を使って調べさせたのか、それには理由がある。

「あれを見せられてはな…」
「ええ…」
「身体中の痣…虐待の痕ですね…」
　服に隠れるようにつけられていた全身の痣が原因だった。
「母は女尊男卑に染まり離婚、父はヤサグレ子供に虐待…この子もこの世界の被害者ということか…」
「織斑先生…」
「大丈夫だ山田先生、一々へこたれていられん。向き合っていかなければダメだからな」
　こうなった責任は私にある。私と束の責任なんだ。あいつはどうでもいいと言うだろう、だから私だけでも手を差し伸べなければならない。
　ビーーーー
「「!?」」
　高見沢の検査機から異常を知らすサイレンが鳴り響いた。あのまま安静なら大丈夫ではなかったのか！
　私達は慌てて検査室へ駆け込む。
「伊達先生！何があった！」
「急に脳波に乱れが出たと思ったら鼻血に痙攣まで！」

「なんだと!?」
脳に負荷でもかかってるのか?こんな急に悪化するなど聞いたことないぞ!
「高見沢!しっかりしろ!」
高見沢を身体に触れる。
ーシンパイシナイデ、チフユー
「!?」
この声…気のせいではなかったのか…。
「織斑先生?」
「…大丈夫だ。すぐに治る」
「そんなはず…えっ?」
そこには鼻血の跡以外は正常な高見沢が眠っていた。
「起きたら呼んでくれ。調べることが出来た」
「え…?あっはい!わかりました!」
「頼んだぞ山田先生、更識は引き続き調査を頼む」
「わかりました」
私は治療室を出て屋上へ向かった。

＊

「さて…」

屋上へきた私は携帯を取り出しある番号にかけた。

いつもはかからず終わるのだが…。

「もすもすひねもす〜！みんなのアイドル篠ノ之束さんだよー！」

なんでこういうときはすぐに出るのだろうか…。

「いやー久しぶりだねーちーちゃん！」

「だな、聞いたいことがある。ＩＳとの感応現象、ただの量産機に触れただけで起こるものなのか？」

「起こるわけないよー、専用機とは違ってその人に合わせた調整もされてないし多くの人が触れるから思考がごっちゃになってＩＳ側が困惑しちゃうしねー。…でもその口ぶりだとあったの？」

「ああ、２人目の男性操縦者がな」

「…ふーん。じゃああの子の話は本当だったんだね」

「あの子？」

「打鉄だよ、みっくんの持ってる子。コアネットワーク経由で束さんに報告してきた

よー」
「そうか、…ん？みっくん？」
「うん、みっくん。ミナトだからみっくん！」
　明日は隕石でも落ちてくるのではないだろうか…？束が私と箒と一夏以外を認識するとは…。
「あの子からの報告みてワクワクしちゃった。いいパートナーを見つけたんだなって、だから束さんも応援しようと思ったの」
「明日は世界の終わりか…」
「ちーちゃん酷くない!?」
「今までのお前を見てたらこう思うだろう」
「あっそうだちーちゃん！みっくんに専用機作ろうと思うんだけどデータ頂戴！」
「このバカ兎がぁぁぁぁぁ!!!」
「はにゃぁぁぁぁぁ!!!!」
　つい叫んでしまった。だが私は悪くないうん。
「み、耳がぁ…束さんのプリティな耳がぁ…」
「お前があいつに興味を持つのもいいが専用機をホイホイ渡すようなことはやめろ！それにあいつは私達の業の被害者だ。おそらく拒絶する」

「虐待だよね」
「そこまで知ってるなら話は早い。この世界の元凶のお前をよくは思っていないだろう、ＩＳのこともどう思っているのか分からん」
「でも、それでもみっくんはこれから狙われることになるよ世界から」
「一夏みたいに後ろ盾があるわけじゃないからな…」
「だから私が専用機を…」
「それはあいつの意見を聞いてからだ。あいつが拒絶すれば無理矢理渡すのも酷だろう」
「わかったよちーちゃん」
「話は終わりだ、またな束」
「うん！バイバイちーちゃん！」
通話終了。はぁ、私の苦労は終わりそうになさそうだ。

＊

起きたら医療器具に繋がれてベットに寝かされていた。いつもと違う、しっかり柔らかいゆったりできる寝床。

起きたら緑髪と水色髪の女性が話しかけてきた。
緑髪の人は山田真耶、水色髪は更識楯無と言った。
どうやら俺はあの後このＩＳ学園に保護されたらしい。ＩＳ学園は一つの国として扱われてるようで日本や他国からの介入はできないから安心していいとのこと。
俺も何故かこのＩＳ学園のことときこの２人について思い出した。勉強した記憶もないのに…。
山田真耶、元日本代表候補生。織斑千冬がいなかったら代表になってたであろう実力者、ただし極度のあがり症。
更識楯無、ロシア代表。対暗部用暗部、更識家の現当主。妹を溺愛しているシスコン。
なんでこんなことを知っているのだろうか？まぁ、俺をどうこうしようとしてないようだからいいか。
その後ブリュンヒルデこと織斑千冬も参加して今後のことについて話された。
１．俺はＩＳ学園へ入学することになった。
２．持っている打鉄は専用機として日本に申請するので持っていてよい。
３．家庭の問題があるので入学まで更識家で面倒を見てくれるとのこと、ＩＳに関する勉強も見てくれるそうだ。
なんだこのＶＩＰ待遇、今までの生活と違い過ぎて泣けてきた。

あのクソ親父と離れられるだけじゃなくまともな暮らしができることに嬉しくて泣いてしまった。

そうしたら山田先生は慌て出すし、更識さんは手を握って安心させてくれるし、織斑先生は頭を撫でて落ち着かせてくるから余計に泣いてしまった。こんな人ばかりならどんなにいいことか。

しばらく泣いてそのまま寝るように言われ寝た。

明日から俺の新しい人生が始まるのが楽しみだ。

今までで一番安心して寝れた夜だった。

第3話

ＩＳ学園でお世話になって2日後、これからお世話になる更識家に来ている。
「凄いですね、楯無先輩の家」
「まぁね～♪これでも名のある名家なのよ？」
「嫌ってほどわかってますよ」
いやもう次元が違うんだけど…。アパートと名家の豪邸だぞ？雲泥の差がある。
「さーて湊君の部屋はここね、必要なものがあったら言って頂戴。すぐ用意するから」
「悪いですよ、そんな」
「遠慮しないでいいーの、家に取りに行くにしても親に会わせる訳にはいかないのよ…。あの痕を見ちゃったらね」
世界に2人しかいない人物に危害を加える可能性があるからだそうだ。まぁ荷物もそんなないしお言葉に甘えよう。
「じゃあお願いします楯無先輩」
「楯無でいいわよ、これから家族みたいなものなんだしね」
「…楯無さんで」

「まぁいいでしょう」
　慣れないからまだ呼ぶのに違和感があるからもう少し待ってください。
「なら早速で悪いけれど、ＩＳの知識の勉強をしてもらうわよ！虚ちゃーん！」
「お呼びでしょうかお嬢様」
　するとドアを開けてひとりのメイドが入ってきた。
「紹介するわね、彼女は布仏虚。私の従者であり来年でＩＳ学園３年生よ」
「布仏虚と申します。以後お見知り置きを湊様」
「よろしくお願いします。あと様とかは大丈夫ですので」
「承知しました」
　高校生で従者持ちとはまた別次元の話に思えてきた。
「じゃあ私は家の仕事があるから失礼するわね。虚ちゃんあとは任せた！」
「任されました。それとお嬢様…サボらないで下さいね？」
「ギクっ！」
　駆け出そうとしてた会長が固まる。サボるな。
「サボるわけないじゃなーい」
「簪様を見に行くつもりですね？」
「あーいやーそのー」

「はぁ…見に行くのは構いませんが仕事は終わらせて下さい。先に仕事量みてからでお願いします」
「はい…わかりました」
そう言って仕事を確認に行く楯無さん、虚さんはできるメイドみたいだ。
「簪様って？」
「お嬢様の妹様です、湊さんと同い年で日本の代表候補生でもあります」
「姉はロシア代表、妹は代表候補、２人とも凄い人だ…ですね」
「無理に敬語を使わなくて大丈夫ですよ、私のことも虚で構いません」
「…すみません助かります、話を戻しますけど楯無さんは簪さんのこと好きなんだな」
「ええ…とても大事にしております」
そう言った虚さんは何処か悲しそうな目をしていた。
「…何かあったんですか？」
「実は…」
そこから虚さんは楯無さんと簪さんの事を話してくれた。
なんでも楯無さんから「何もしなくていいそのままでいい」と言われ、それ以降姉妹間に溝ができてしまった事、簪さんも元々内気な性格もあり話ができていない事、今の姉妹間での会話はほとんどなくそれが数年続いてしまっているという。

「楯無さんが謝らないと話になりませんね」
「そうなんですけど、お嬢様も簪様のことになると奥手になりまして…」
「無理にでも機会作らないとどうにもならないですよ」
「…お嬢様はそうすると逃げるんですよ…」
「子供かよ…」
　まぁ正直言うと今の俺には関係ない事だ。もし俺が簪さんの立場だとしていきなり現れた俺があーだこーだ言っても何も聞く耳持たないだろう。これは姉妹の話だからあなたには関係ないとでも言われて終わりだ。
　という訳で俺は何もしないそうしよう。
「まぁ、部外者の俺がどうこうできないんで今は勉強始めませんか？」
「…そうですね…。かしこまりました、では私についてきて下さい。道具などは揃えてあります」
　そうして俺は虚さんについて行き勉強を開始した。

＊

「有り得ないです…」

虚さんがそう呟いて俺の書いたテストの答えをみて固まっている。

虚さんがまずどの程度までの知識ならあるかを確かめるための簡単なテストをしたのだが…、一回目満点、２回目満点、３回目は急に整備関連や技術関連のマニアックなところまで出題されてたが満点をとったら虚さんが固まった。

「湊さん、正直に答えて下さい。小さい頃とかに英才教育やＩＳに関する勉強などはしていましたか？」

「いや、全くしてないですが…俺の家庭環境知ってますよね？」

「はい…知ってるからこその確認なのですが…、ここまで知ってるのはおかしい事なんです」

「え？」

「１回目は基本中の基本、一般人でも耳にするような内容でした。２回目はＩＳの基礎、ＰＩＣや拡張領域、単一仕様能力に第二形態移行などの応用も含めて出題したもの、３回目に関しては整備時の部品の種類、推進力の調整の計算、システム構築の問題まで出したのに湊さんは全問正解、しかも迷った様子もなくスラスラと書いてました。答えを見ながら書いていたと言われたほうが信じれるくらいです」

どうやら相当やばい事をしてしまったらしい。

「私も３年の授業内容まで勉強してますがここまでではありません」

「そうしたら俺はどうすれば…？」
「少し待っていて下さい。お嬢様に聞いてみます」
　虚さんはそう言って部屋を出た。
「俺…どうしちまったんだ？」
　ＩＳを起動してから聞いたり耳にしたらするたびに思い出すように湧き上がってくる知識、瞬時に理解して答えが書けた。まるで最初から知っているみたいに…。
「やっぱお前の仕業なのか？」
　首のチョーカーに触れる。
　あれから外せなくなった打鉄、どうやっても拒絶して離れないらしい。
「少し寝るか」
　俺はそのまま仮眠に入った。

同時刻

「どういう事なのよそれは!!!!」

とある情報が入って楯無は声を荒げた。その内容は…

「高見澤湊への打鉄弐式の譲渡、及び更識簪の専用機譲渡の先延ばし」

＊

「……」

私は更識簪、今2人目の男性操縦者の部屋を覗いている。

さっき虚さんに出会って、休憩中なのでお会いになってはいかがでしょうか?と聞かれたのでどんな人かだけ見に来た。のだが…。

「寝てる」

寝てた。

「少しだけなら…」

私は確認するために部屋に入って2人目の横に移動した。

顔はこれといって普通、可もなく不可もなくといったところ。私としては別に気にし

ないけど。

「仲良くなれるかな…」

１人目…織斑一夏とは弐式の事があるので仲良くできないと思ってる。彼の専用機か優先されたせいで弐式の開発が止まり、私が開発を引き継いでいる。

こんなことは普通はしないのだが、私はお姉ちゃんに認めて貰うために１人でＩＳを完成させなきゃいけない。

２人目…高見澤湊とは１ヶ月うちで預かるのでどんな人か知っておきたい。もし仲良くなれるなら仲良くなるでそっちの方がいいと思ってる。

「あれ？」

首のチョーカーが淡く明滅してるのが見えた。確か彼の専用機ということになった打鉄だったはず。

私は少し気になってチョーカーに触れた。

＊

思い出した、ここの空間を。

「なんで忘れてたんだろうな」

俺は頭を掻いてその場に座り込んだ。また前のように打鉄が話しかけてくるだろうと思ったからだ。

「え…ここ…どこ…？」

「!?」

打鉄ではない女の子の声が聞こえて振り返ると…。

「…あ」

楯無さんのように水色の髪、内側に跳ねた癖っ毛、つり目にメガネで内気そうな感じの女の子。

「君は？」

「えっと…更識簪…です…。あっあの…その…初めまして…」

「あ、あぁ…初めまして。高見澤湊です」

一目惚れだった。

簪さんから目が離せない。身体の奥から熱が込み上げてくる。

「…私に何か…？」

「ごめん！そんなつもりじゃなくて…！」

簪さんは恥ずかしさのあまり目を逸らしてしまった。

とりあえず気を取り直して。

「簪さんはなんでここに？」
「高見澤君はここわかるの？」
「湊で大丈夫だ、後名前で呼んでごめん」
「私もそっちの方がいいから大丈夫」
「それならよかった。ここは俺と打鉄の対話空間？みたいなところなんだ」
「ＩＳとの対話空間!?」
「今回で２回目なんだけど、他の人が来るのは知らなかった」
　簪さんはその場で固まってしまった。
「簪さん？」
「すごい…」
「え？」
「すごいよ！ＩＳと対話出来るなんてまるでダブル○ーの刹○みたい！あれは機体とはしてないけどそれでもまるでヒーローみたい！すごいよ湊！」
「おっおう…」
　まるでキャラが変わったように話し出した簪さんに若干押されてしまった。
「…あ！…ごめんなさい…私…」
「あー大丈夫だから、ちょっとびっくりしただけだから」

「変だよねこんなの…本当にごめんなさい」
「いや少し驚いただけだからそんな気にしないで」
「……うん」
落ち込んでしまった簪さんの肩に手を置きながら落ち着かせる。
ータシカニソノヒトトハチガイマスネー
「え？」
「打鉄か」
ーカンザシワハジメマシテデスネー
「私の事知ってるの？」
ーニシキカラキイテイマス、ソシテ、アナタヲヨンダノモ、ニシキノコトニツイテナノデスー
「!!弐式に何かあったの!?」
「弐式？」
「わたしの専用機…、１人目のせいで開発が止まっちゃって…」
「それで凍結状態なのね」
「ううん…私が１人で開発してる…」
「…マジ？簪さんってＩＳ作れる技術持ってるのかすごいな」

「いや…私は…」
ーカンザシワ、タテナシニタイコウシテ、ヒトリデカイハツシテオリマスー
「あ！それは！」
「楯無さんに対抗して？」
「あのそれは…」
ーソレハカンザシガ…ー
「待って！…自分で話すから…」
それから簪さんは自分の事を話してくれた。
楯無さんに「無能のままでいなさい」と言われた事、楯無さんが霧纏の淑女を１人で開発したことに対抗して自分も１人で作れば姉に認めて貰えると思い１人で開発してること…。
とりあえず思ったことは、楯無さんがクソ不器用ってことだな。
ーソレハチガイマスネー
そこに最初に口を出したのは打鉄だった。
ータテナシワ、ヒトリデワカイハツシテオリマセンー
「え？」
ーカイハツシタノワ、アクアクリスタルブブンノミ、ソレモテツダワレナガラニヨル

モノデスー
「簪さん…大丈夫？」
「うん…大丈夫」
今の話を聞いて簪さんはショックを受けてしまったみたいだ。
「お姉ちゃんはやっぱり私の事嫌いなんだ」
「それは違うと思う」
「ッ!!貴方に何がわかるの!!」
簪さんに睨まれるが気にしないで話を続ける。
「ロシアの見栄張りだと思う。印象って大事だから」
「じゃあ！無能って言ったのは！」
「簪さんをそういうのに巻き込まないためだと思う。更識家って政府との関わりもあるんだろ？それに関わらせたくないから突き放すような言い方をしたんじゃないかな？」
「私だって更識の人間だからそのくらいやれる…私が無能だから…」
「無能じゃないだろ？代表候補生になってるし、それも日本でもトップクラスなんだから」
「なんで知ってるの？」
「あー…えーと」

ーミナトワＩＳノコアネットワークノデータヲ、スベテオシエテマス。カンザシノデータモソコニアリマスー
「それじゃあ…」
「…うん、代表候補生って事、アニメ、主にヒーロー物が好きなことを知った。さっき自己紹介したときに」
そう言った後簪さんは顔を真っ赤に染めて蹲ってしまった。
「変だよね…こんな趣味」
「いいじゃないの？人それぞれでしょ」
「…え？」
「この程度なんとも思わないよ」
「さっき引いてたのは…？」
「急にキャラが変わったからね…」
簪さんはまた蹲ってしまった。
ーホンダイニモドッテモ？ー
「ああ、いいぜ」
「そういえば弐式の事って！」
慌てて我に帰る簪さん。

ーニシキガカンザシノモノデワナクナリ、ミナトノモノニナルケイヤクガカワサレマシターー

簪さんは膝から崩れさってしまった。

「弐式は簪さんのものだろ?それにお前は俺から取り外せないんじゃ」

ーニシキノブソウトソウコウヲ、コチラニイショクスルヨテイダソウデス。コノホウホウナラコウカンガデキテシマイマスー

「どうにかして弐式を簪さんのままにする方法は?」

「…湊さん?」

「折角姉の事もわかって歩み出そうとしてる子をほっとけないし、それにな…」

「それに?」

「いや…なんでもない。それより方法は?」

ーニシキノコアヲゴウダツ、ソノゴベツノISトシテカンセイサセ、カンザシサマニジョウトスルコトー

「無謀過ぎないか?」

ーカアサマニキョウリョクヲヨウセイシテイマスー

「母様?」

ータバネサマデスー

「ッ!!協力要請の可否は?」
ーショウニンサレマシタ、ワタシノカイゾウヲスルトモイッテオリマスー
何故篠ノ之束が俺に協力するかは知らないがこれならなんとかなるかもしれない。
ーデスガコレニハジョウケンガアリマスー
「言ってくれ」
ーソレハ…ー
条件はこうだ。
俺が女性権利団体の排除を手伝う事。
つまり人を殺せという事、逮捕しても結局はすぐ出てきて変わらないから消すしかないという事。
束様のＩＳ開発を手伝う事。
これは何されるかわからない。
これだけだった。
もっと言われるかと思っていたがそうでもなかった。だが、これを聞いた簪さんは黙ってなかった。
「待って!なんで湊さんがそこまでするんですか!私の問題です!」
「それは…」

そう、正直俺にメリットはあまりない。打鉄がそのままになるというだけなのだ。

ーミナトガアナタヲスイテイルカラデスー

「え？」

この打鉄何を言った？

ーカンザシノコトガスキダカラデスヨー

「えええええ!?!?!」

簪さんは真っ赤になってへたり込んでしまった。俺は恥ずかしさで目を逸らす。

「え!?.え!?.あの!?.その!?.えええ!!!」

「…落ち着いて簪さん」

落ち着かせようとするが…。

「だって…！私たちさっき会ったばかりで…、お互い何も知らなくて…。そのあの…アワワワワワ」

むしろ落ち着かないだけだった。

こうなったら仕方ない。

「簪さんの事を好きになったのは見た瞬間なんだ、つまり一目惚れ。本当は黙っておくつもりだったんだ。俺は世界からも目をつけられてるし、迷惑かけると思ってたから。だけどこうなったら思いの丈を伝えるよ。…簪さん、俺は貴方の事が好きです。返事は

今すぐとは言いません、簪さんの気持ちの整理がついたらその時に教えて下さい」
「…」／／／／／
「簪さん？」
「きゅう～」バタンッ
「簪さん?!」
茹でタコもびっくりの真っ赤に染まって気絶してしまった。
「打鉄…人の心をあまり読むんじゃない」
ースミマセンー
「まぁいい、その条件で飲むよ打鉄」
ーリョウカイシマシターー
その会話の後視界は真っ白に染まった。

＊

目覚めた俺は膝の上に何かが乗ってる感覚を覚えた。
膝の上で簪さんが寝ていた。
「さてどうするか…」

「ううん…」
　考える間もなく簪さんは目覚めてしまった。
「あ」
　目と目が合いしばらく膠着し…。
「あの空間の内容覚えてる？」
「／／／／」コクン
　真っ赤になりながらうなずく簪さん。
「あの話は嘘じゃないし、この気持ちも本物だよ」
「…返事は待って…まだ貴方のことをもっと知ってからにする…」
「それで大丈夫」
　簪さんは立ち上がり部屋から出て行こうとする。が、出る直前で立ち止まった。
「あっ…あの…私の事は簪って呼び捨てでいいから…、私も湊って呼んでいい？」
「勿論、よろしく簪」
「！うん…よろしくお願いします…湊…」／／／／
　簪は部屋から駆け足で出て行ってしまった。
「さて、行きますか」
　俺は立ち上がり打鉄に送られてきた座標に向かうことにした。

書き置きを残して

＊

楯無と虚は湊の部屋に急いでいた。
「全く上の連中は何を考えてるのかしら」
「湊様に伝えてその後はどうしますか？」
「とりあえず掛け合うしかないでしょ！何がなんでも簪ちゃんを助けるわよ！」
そうして部屋に着き扉を開く。
「湊君！少し話いいかし…ら…」
「どうしました？お嬢…さ…ま…」
部屋を開けたら、そこに湊はいなかった。
「誘拐ですか!?すぐに確認を！」
「待って虚ちゃん！机の上！」
机の上には一枚の紙が置かれていた。
『楯無さんへ
突然居なくなってすみません。これから俺は簪さんの弐式の件をどうにかするため

にこれからその為に動きます。
簡単に言うと篠ノ之博士と行動を共にし、暫くそこで仕事をするつもりです。
打鉄に届いたメールで誰にも内容を喋るのはダメだと書かれていたので仕事の詳細は書けません。ですが、弐式は必ずどうにかしますので信じて待っていて下さい。
自分勝手なのは重々承知ですがよろしくお願いします。
P．S．
簪さんは霧纏の淑女の開発事情と楯無さんの本心について知りました。
今なら仲直りできるはずです。頑張って下さい。

湊」

これを見た楯無は…。
「なんなのよ全くもう!!!」
怒りと嬉しさでごっちゃになっていた。
「あははは…」
虚は苦笑いしてた。

第４話

とある海上で一機の打鉄が飛んでいた。

「まさか篠ノ之博士のラボが空にあったとは…」

座標と一緒にメッセージが送られてきてその内容が…

ここで待ってるよー、座標まで着いたら垂直に雲の上まで上がってきね♡

天災がいかにヤバいかが分かる一文だった。

そんな人が協力を申し出てくれるのは有り難いのだが急に不安になってきた…。新兵器開発とか言いながら腕ごとされないだろうか…。不安だ…。

「座標は…ここか」

そしてそのまま垂直に上昇、量産機といえど中々の速度で上昇していく。やがて雲に差し掛かりそのまま突き抜ける。雲を抜けると…。

「綺麗だ」

下には雲、上には成層圏が広がっていた。飛行機でしか見れない景色を自分はここに立っているかのように眺めている。

「ＩＳが作られたせいで俺はクソみたいな人生を送った…。けど、ＩＳが作られたおか

げで俺を見てくれる人に出会えた。簪に会えた。それにこの景色は本物だ」
不安な気持ちは吹き飛び今は穏やかな気持ちで飛んでいる。
飛ぶのが気持ちいい。
「篠ノ之博士のラボを探さないと」
ガコンッ
「？」
いきなり目の前で機械が動く音がした。
すると…。
ガガガガガガガガ
何もない空間に格納庫らしき入り口が現れた。
その中には白髪の目を閉じている少女がいる。
「湊様ですね、お待ちしておりました。こちらへ」
少女に促され着艦する。
「お初にお目にかかります。クロエ・クロニクルと申します。束様の助手をさせてもらっています」
「高見沢湊だ、よろしくクロニクルさん」
「クロエと呼び捨てで構いません」

その時にクロエの情報が流れてきた。
これはあまり触れない方がいいか。
「構いませんよ」
「え？」
「束様に聞いております。コアネットワーク上のデータを閲覧出来るんですよね？」
「閲覧というか…思い出す感じなんだけど」
「関連したことに関わると思い出す感じなのでしょうね、束様が言っておりました」
「なるほど、それとさっきなんで考えてる事分かった？」
「わかりやすいですよ？湊さんの心」
気をつけよう。
「では、束様の所にご案内いたします」
出撃ハッチから扉をくぐり隣の部屋に移動した。
そこは機体の整備室だった。４つ程機体を置く場所がありその一つに篠ノ之束は座って武装などの製作を行なっていた。
「やぁやぁ初めましてだねみっくん♪会いたかったよー！」
「初めまして篠ノ之博士」
「じゃあ早速ＩＳ見せてくれるかな？改造しちゃうから！」

「その前に少し質問いいですか？」
「んー？いいよー？」
篠ノ之博士に会ったら昔から聞きたいことがあった。
俺にとって大事なことだ。
「今回協力を受けてくれたのは何故ですか？」
「簡単だよ、私がみっくんの事を気にいったからだよ。ＩＳに触れて間もないのにＩＳの稼働率が９０％オーバー、更にはＩＳのコア人格との会話もできる、それにみっくんはＩＳの事をどう思ってる？」
「相棒だと思ってます。それと可能性の塊だなと」
「その答えで十分！そう思ってくれて束さんも嬉しいよ」
「じゃあ最後の質問です」
これが本題。
「博士は今の世界をどう思ってますか？」
「…それはＩＳの開発者視点から見てってことかな？」
「白騎士事件を起こした張本人、そして世界を変えた元凶として」
「あちゃ～痛いところついてくるね～」
気楽な感じで話しているが頭のうさ耳がしょんぼりうな垂れている。本人的に言わ

れたくないことらしい。
「酷く歪んでるね、みんなＩＳを兵器として見てる。みっくんみたいな考えの人は極小数で私の望んだ世界にはならなかった」
「あんなやり方をすればこうなるだろうと思わなかったのですか？」
「思わなかった…でも今ならわかるあれは愚作だったよ…。急ぎすぎてたのかな、ＩＳが認められなくて手っ取り早く認めさせるためには大きな事が必要だと思ったから後先考えずに…」
　白騎士事件の全容を知った今としては急ぎすぎたとしか言えない。やり方が悪かった。
「そのせいでこの世界が変わって女性権利団体ができた」
「だから潰す。ちーちゃんが動けない今私がやるしかないからね」
「責任を感じてるなら俺は何も言いません。ＩＳがなかったら簪達には会えなかったから」
「みっくんには辛い思いさせちゃったね…」
「いいんです博士、質問は終わりです。これからよろしくお願いします、博士」
「うん！じゃあ早速打鉄を改造しちゃおっか♪」
「改造しようにもこいつ、首から取れないのですが」

「その点については大丈夫、ささ打鉄見せてー」
そう言って博士は打鉄の待機形態のチョーカーに触ると簡単に取った。
「あれ？」
「この子が大丈夫って思った人には外れるようになってるんだ。それ以外の人だと嫌がって外れないだけだね」
「なるほどな」
「じゃあ早速改造だー！クーちゃんも手伝ってー」
「かしこまりました。束様」
「頼みます」
こうして打鉄の改造が始まった。

＊

おかしい…改造が終わったら出撃ハッチの前に移動させられて出撃準備してにはいってるんですが…。
「さぁ早速性能を試してみよー！」
「待って」

「目標は倉持技研にある打鉄弍式のコアの奪取です。織斑一夏様の専用機になる予定の白式が保管されている区画にはダメージをださないようにお願いします」
「クロエも止まって」
「あと女性権利団体の連中が来てるみたいだからついでによろしくね♪」
２人とも止まってくれないのだけど。
「さぁみせて貰おうか、ＩＳに選ばれたみっくんの実力を！というわけで行ってらっしゃーい」
その声と共に空中に射出された。
ていうかさ…。
「俺…このＩＳの説明受けてないよな？」
今更戻るのはなんか気まずいのでそのまま行くことにした。奪ってサクッとやっておしまいだ。
『聞こえますか？湊様？』
「聞こえてるよクロエ」
『倉持の警戒範囲に入るまでの数分で湊様のＩＳの説明をいたします』
どうやらここでされるようだ。
『今回の改造は機動性強化と拡張領域の拡張です。非固定の浮遊シールドと下半身の浮

遊装甲を排除、代わりに脚部装甲にスラスターを増設し背面に非固定の試作展開装甲の大型ブースターを搭載しました。離脱の際に役立てて下さい。

そして減った装甲の分拡張領域を広げ、そこに試作型の武器を搭載しました。

搭載武器は試作展開装甲搭載のブレード、シールド、そして大型化下腕部装甲ないに内臓したバルカン砲です。

ブレードは刃の部分が開きビーム刃を展開出来る様になってます。シールドは大型ビームキャノンを内臓、バルカン砲は腕部の上部に配置してあります。牽制程度の威力です。

打鉄の基本武装のブレードの葵とアサルトライフルの焔備は搭載してますのでご安心下さい。

最後に防御力が大きく減っておりますのでお気をつけ下さい』

「了解した、あとバイザーとボイスチェンジャーもありがとう」

『正体がバレてしまうのは得策ではありませんからね、あと機体カラーは灰色でよかったのですか?』

「いいんだこれで」

灰色の打鉄は海の上を真っ直ぐ進んでいく、そして大きめの建物が見えてきた。倉持技研だ。

『こちらでハッキングしてシステムダウンさせます。その間にお願いします』
「了解」
システムダウンしたのを確認してから屋上から侵入した。

＊

倉持技研は混乱していた。いきなりハッキングを受け施設全てのシステムが落ち突然の攻撃に誰もが戸惑っていたのだ。
「さっさと復旧させなさい！」
研究員の格好ではなく、スーツを着た女性が騒いでいた。
この女は女性権利団体の一員の女性で弐式の確認に来ていた。完成されたら困るからだ。
「なんなのよほんと！急にドアが開かなくなるしデータがどうの言ってこっちは無視だしこれだから男どもは!!」
弐式の保管されている区画にいたこの女は完成してないのを確認して早々に帰ろうとしたら丁度ハッキングを受け出れなくなったのだ。それを近くの職員にドアを開けさせようとしたらデータ復旧に手一杯で話を聞かれなかった。

ドアを叩いて喚き散らしていたらドアが少し開いた。隙間から見えたのは機械の手、どうやらＩＳの力でこじ開けているようだ。

「早く開けなさい！流石ＩＳだわ男なんかより全然役に立つ！」

そしてドアを開け放ちそこにいたのは灰色のＩＳ、装甲がほとんどなく背中に大型のブースターを背負ったアンバランスな機体、顔にはバイザーをかけ顔はわからないが黒髪短髪ということだけはわかる。

「助かったわ！さぁ早く私を外に出しなさい！」

「…お前が…」

「え？」

私が何？そう思った時には顔を掴まれていた。

「ーーーーーーー!!!」

声がまるで出ない。口を塞がれているから当たり前だ。

相手を睨めば見えた、見えてしまった。右手に持った近接ブレードを…。

＊

弍式の保管されている部屋のドアを開けたらいきなり女性権利団体の女がいた。ク

ロエに送ってもらっていた写真とも一致する。
手間が省けたから顔を掴んで叫ばないようにする。声聞きたくないしな。
弍式を簪から取り上げようとした奴、なんだろう殺す時は罪悪感とかで躊躇うかと思ったが俺はそうでもないらしい。それもそっか。
「ーーーーーーーー!!!!」ゴフッ
こいつは死んでいい奴だからな。
右手に持った葵を腹に突き刺す、ついでに胸にも突き刺しといた。
口から血を大量に流して暴れる女、これ以上汚れても嫌だから部屋の脇に投げ捨てた。
そのまま女は生き絶えた。以外に呆気なく終わったもんだ。
気付いたら周りの研究員から見られていた。あんなに騒いでたやつが急に静かになったら逆に目立ってしまったのだろう。その目には恐怖が見えた。自分も殺されると思っているのだろう。
俺はそのまま真っ直ぐ弍式のもとへ向かい目の前に着地した。
「で？君は誰だい？」
唯一怯えてない女がいた。
「弍式のコアを寄越せ」

「君が誰かわからないけど渡すわけないでしょ？この子は簪ちゃんのものなんだから」
　この人は簪のものだと言った、するとこの人は…。
「２人目のものになると聞いたが？」
「あーんな上の連中の言うことを誰が聞くもんか！この子は簪ちゃんのものなんだから簪ちゃんに渡すのがメカニックとしての意地だね、勿論君に渡す気もないけど」
「私もそうだ」
「ん？」
「簪に渡すために奪う」
「…ふーん？」
　目の前の女は覗き込むように見てくると何か納得したような顔になった。
「じゃあ……んしょっと……はい、頼んだよ」
　弐式のコアを渡してきた。
　周りの研究員が驚いている。
「何故？」
「ただ奪うならこんなに話さないでしょ、それにこのままでも簪ちゃんに渡さなかったしねぇ～」
「そうか…ありがとう」

「その代わり、しっかり簪ちゃんに届けてね」
「わかってる」
俺はそのまま部屋を出て侵入してきた屋上を経由して倉持を離脱した。

「ッ?!」
後ろからの突然の狙撃に慌てて緊急回避を行う。少し遅かったためか足の装甲に掠ってしまった。
きた方向を見れば2体の打鉄とラファールが向かってきていた。
「追手か、早いな」
あの女の死が伝わったか。
「よくも大胡様を!!」
「私が殺してやるわ!!」
あの女の名前か、どうでもいいが。
「試してみるか」
左手にはコアがあるから使えない。なので右手に試作ブレードを展開する。形は葵を一回り大きくそして長くした太刀の様な形で所々に機械の意向が見られる。

左手にはシールドを展開、手は阻害しないため展開できる。こちらは標準的な大型の西洋盾といった感じ、真ん中に太めの砲身があるのが違いか。

「盾の検証開始」

すると盾の真ん中部分が残り四角い砲身を形成残った部分は横に広がりボウガンの様な形になった。

「まずはラファールに…」

バシュン！

「ッ！」

危うくコアを落とすところだった。撃ったビームはラファールに直撃肩の装甲を吹っ飛ばした。中々の威力だ。

「このぉぉ!!」

打鉄がアサルトライフルを連射してくる。即座に盾に戻してガードして弾をすべて防ぐ。

「ライフル程度なら問題なしと」

そのまま打鉄が斬り込んでくる。右手の試作ブレードで対応、斬りつける。

斬り結ぶが力は拮抗、片手と片手では軽い打ち合いしか出来ない。

一旦離れて展開装甲を起動、ビーム刃を形成して斬りつける。

「遅い…何!?」
　避けられたのだが当たった。ビーム刃から斬撃が出たのだビームの。
「そういう武装か」
　一通りの武装把握はできた。よし離脱しよう。
　そう思ったのだが…。
「「……」」
　挟まれていた。ラファールが追い付いて逃走経路を塞いだのだ。
　２人は怒りの形相で睨んできている。
「どうするか」
　正直戦いは初めてだ。俺の打鉄が色々教えてくれたとはいえ戦闘は素人、慣れやそもそも身体が追いつかない。
　そして相手が２人、分が悪すぎる。
「大胡様の仇！」
「女の恥さらしがぁ！」
　打鉄がアサルトライフルで攻撃、ラファールが両手にサブマシンガンで攻撃してきた。俺は弐式のコアを守りながら逃げようとするが挟まれてるのと弾幕で逃げられない、装甲が薄いことも合わさってシールドエネルギーがガリガリ減っていく。

死ぬ…そのイメージがよぎった。

ーワタシニユダネテー

「打鉄？」

ーナントカシマスー

「頼んだ」

迷ってる暇はなかった。なんとかなるなら任せる。

ーエンゲージー

思考がクリアになった。

冷静になったとも違う、様々な情報をすべて処理、適切な行動を瞬時に判断、実行。

「え…きゃあ!!」

敵の打鉄が斬られた。

俺は大型ブースターを起動しさらに瞬間加速も併用して一気に肉薄しビームを展開したブレードで斬りつけた。

そのまま裏に回り込み連撃を加える。

ラファールが敵打鉄が邪魔で撃てないのでブレードを展開して突っ込んでくる。

俺は敵打鉄を蹴っ飛ばしてラファールに飛ばす。盾のビーム砲を展開してありったけを連射、敵打鉄とラファールが爆発に巻き込まれる。

黒煙から打鉄が落ちていくそれをラファールが慌てて支えに行く。
隙あり。
「終わりだ」
ブレードのビームを形成してラファールを斬り裂いた。

＊

海上に浮かぶ二つの死体、どちらも女で胸部に背中まで貫通する傷があった。
その死体が回収され所持品の中に起動しっぱなしのボイスレコーダーがあった。内容は死ぬ前の犯人の手がかりを残すために死ぬ間際に起動したものと見られる。
犯人の内容は
「お前ら女性権利団体がなくなるまで私はお前達を殺す。何度だって蘇ってでも殺す。亡霊になっても呪い殺してやる」
その後何かを突き刺す音と悲鳴でレコーダーの内容は終わった。
倉持を強襲した灰色のＩＳと同一と見られ、のちに女性権利団体が衰退する原因となるＩＳの呼称が決められた。
灰色の亡霊ーグレイゴーストー

＊

簪視点

あれから1ヶ月、私の周りの環境は大きく変わった。

まずお姉ちゃんと仲直り出来たこと。

お姉ちゃんもずっと仲直りしたかったらしく私の事を好きでいてくれた事がとても嬉しかった。それからは私もお姉ちゃんの手伝いをしている。書類の溜まり具合を見て苦笑いしたけど。

2つ目、打鉄弐式は正式に無くなった。

倉持技研から強奪されたので私の手持ちＩＳは今のところない、正直今更倉持からＩＳを渡されても受け取らなかったと思う。だから開発に追われることもないから規則正しい生活を送れてる。

3つ目、女性権利団体の衰退。

ここ1ヶ月で女性権利団体幹部クラスから下っ端までの汚職などの記録が流出、警察などが逮捕しようと動いた時にはその人達は行方不明か死体のどっちかになっていたらしい。それを恐れて多くの団員は悪行をやめて表舞台から去った。因みにその汚職

の中に私の弐式の件もあった。
湊に弐式を渡してそのまま未完成のまま放置して倉持及び日本政府とを繋ぐ鎖として持たせるだけだったらしい。捨てれば拉致扱いで監禁からの実験素体にする。本当に今の政府は中々に酷い人ばかり
最後、湊がいない。
あのあとすぐにいなくなってしまって寂しくなってしまった。会って少ししか話してないけど初めて気を許せる男の人だったからってのもあるけど、やっぱり告白されたからだと思う。
……恥ずかしくなってきた。
でも分かってる。灰色の亡霊ーグレイゴーストー、あれは湊だ。
篠ノ之博士の手伝いの中に女性権利団体の抹殺とあった。一連の事件はすべて湊と篠ノ之博士の犯行だ。
多分、湊は今相当精神をすり減らしていると思う。私が支えてあげなきゃ、弐式の事も含めて恩返ししなきゃいけない。
だから、学園に湊がいつ来てもいいように私が居場所になるから、待ってるからね湊。
「それじゃ次の人お願いします」
「更識簪です。皆さんよろしくお願いします」

ＩＳ学園で待ってるからね。

第５話

　中国のとある場所、女権団の研究施設があると情報を得て俺達は飛空挺〈エンタープライズ〉(名前をつけようとなって灰色の亡霊の元ネタの名前にした)ごと中国上空までステルス機能を使い侵入し研究施設がある場所の上空で待機していた。
「みっくん作戦内容は覚えてる?」
「殲滅」
「オッケーいってみよう!」
「落ち着いてください湊様、束様」
　俺と束博士の発言に待ったをかけるクロエ、そしていつも通りクロエから確認のために説明がはいる。
「束様のハッキングで施設内を混乱させますのでその間に侵入、研究データの奪取及び施設の破棄をお願いします」
「了解、いつもありがとなクロエ」
「そう思うなら悪ふざけも程々にして下さい」
「束さんとみっくんは至極真面目だよー!」

「ごめんなクロエ」
「みっくんが裏切ったぁ?!」
いつものように会話を交わしながら俺はエンタープライズの後部ハッチを開放、出撃準備を整えた。
「みっくん1分後に出撃!」
「了解」
そう言って束博士はハッキング作業に入った。
「ねぇみっくん」
「なんですか?」
「束さんの家族になるつもりはない?」
「…急に何ですか……」
「みっくんには帰る場所は今のところないでしょ?だから家族になればこれからもここに帰ってこれるでしょ?」
急な何を言い出すかと思えばそんなことか。
「家族になる必要はないですよ」
「え…?」
悲しそうな顔をする束博士とそれを聞いていたクロエ。

「もうとっくにここは俺の帰る場所です。テストパイロットとしてだとしても俺のことを必要としてくれた、それだけで充分です」
「みっくん…」
「湊様…」
「いつも通り帰ってきます」
そう言い残し俺は後部ハッチから飛び降りた。身体は自由落下を始め研究施設目掛けて落ちてゆく。
「行くぞグレイゴースト」
ーリョウカイデスー
暫く落下したあとグレイゴーストを展開する。
女権団につけられた名前だが少し気に入っていた。名前を考えていたのだがグレイゴーストが俺の思考を読んでこれでいいと登録してしまったのだ。
グレイゴーストも気に入ってるからいいとしよう。
そしてグレイゴーストは改修を繰り返し装備を変えていた。
射撃武装に対物ライフル、足についた５連装ミサイルポッドが２つ。
格闘武装に大剣と折り畳み式のブレードを左腕に装備している。
そして試作型の大型ビームブラスターを拡張領域にしまってある。

ー「リンケージ」ー

俺とグレイゴーストとのリンクを確立させる。

これは操縦者とＩＳを一心同体にすることで脳のマルチタスクをサポートし処理速度を向上させ戦闘能力を最大限引き出す能力だと束博士が言っていた。

世界でみてもこれが出来るのは極小数でＩＳに認められなければできないのだとか、ちなみにこの上位互換〈エンゲージ〉が存在する。

あれは操縦者の脳をもう一つのＩＳコアと見立てＩＳのコアと同じ処理をさせ擬似的に２つのコアによる演算で最適解を叩き出しそれを実行し戦闘を行うというもの。

だがこれはそもそも操縦者の脳が耐えきれず焼き切れるので出来ないらしいがどうやら俺は情報を叩き込まれたときに脳もいじられたらしく出来るそうだ。人間やめました。

そのまま研究施設に突っ込んでいく、ハッキングの効果だろうか今のところ研究施設の防衛行動は見られない。

「正面からいくぞ」

正面の入り口を派手にぶち破って室内に侵入する。そのままサーチ機能で施設内の人間と施設マップを作り出したのだが…。

「反応無し？」

ーコアノハンノウモアリマセンネー
「とりあえずデータだけでも取りに行くか」
俺はそのままマップを頼りに地下のメインサーバーへと向かっていく。
進んでいっても人の気配はなくあっさり目的の部屋に到着した。
「破棄されたあとなのか？」
ーワカリマセン、シンチョウニイキマショウー
そのまま目的の部屋の扉を開け中に侵入する。
だが人はおらずただ役目を終えたであろうＩＳ整備用のハンガーが数個あるのみだった。
とりあえずメインサーバーであろう機械に遠隔ハッキング用の装置を設置しあとは待つだけで束博士が勝手にデータの抽出をするだろう。
ーコアハンノウカクニンー
「上!?」
反応確認からすぐ後ろの天井が崩れて何かが落ちてきた。
それは全身装甲の黒い身体に馬鹿みたいに巨大化した腕、腕の先にはビームの発射口らしきものが見える。そして何より驚くのは…。
「コア反応はあっても生体反応は無し…隠してるのかはたまた本当にいないのか…」

生体反応がない事だ。ＩＳならば人が乗っていなくてはならないだがもし無人機が開発されたというなら…まだ俺の仕事は終わりそうになさそうだ。

「無人機だろうが人が乗ってようが関係ない」

ーテキＩＳ、キマスー

無人機がこちらに両腕のビーム砲を向けて砲撃してきた。

「潰すだけだ」

俺はそのまま前に瞬間加速、身体を少し捻り紙一重でかわす。そのまま突撃し大剣を振りかぶって叩き切る。

しかしその攻撃は腕によって防がれ火花散らすだけにとどまった。

「硬いなデカブツ!!」

今度は体制を戻しながら対物ライフルを放つ、だが同時に無人機もビーム砲を放っていた。

結果的に無人機の頭部に対物ライフルが直撃、こちらは左肩に当たってしまった。

「ーーっ!こんなの生身の人間に撃ったら跡形ものからねぇぞ!!!」

威力が頭がおかしい、ＩＳでさえまともにくらえば瀕死手前までもってかれるだろう、もし瀕死のＩＳがくらえば絶対防御を突き抜けて操縦者を殺すだろう。

「左腕がきっついな…。それとその武器いいなそいつよこせよ!」

床に足をつき床を蹴ってもう一度突っ込む、同じく迎撃にビーム砲を撃ってくると思ったがそうではなく身体を回転させ全方位にビームを放ってきた。
ビームの合間を縫うように移動し、あるいは大剣を盾のようにして突き進みながら肉薄する。
そして左腕に組みつき腕の付け根の装甲が薄そうな部分に大剣を突き刺す。ギチギチバチバチと機械が引きちぎれる音をたてながら腕を強引に切断する。
無人機は引きちぎれてすぐ残った右腕で殴ってきた。それをくらい大剣を手放してしまった。
「痛みを感じないってのもいいもんだな…腕切れても反撃する余裕あるんだからな」
こっちは大剣損失、左腕か動かしづらい。相手は左腕損失、頭部が軽く破損。
「問題無しだ、行くぞグレイ」
ー「エンゲージ」ー
グレイとエンゲージを行い最高稼働の状態にもっていく。
「シズメ」
瞬間加速を何回も行いながら複雑な軌道で攻撃を仕掛ける。室内でこんなことをすれば壁に衝突するのだが壁を蹴り床を蹴りながら無理やり方向転換を行っている。
無人機は翻弄され的を絞れず射撃が当たらない。

左腕のブレードを展開して手に持ちすれ違いざまに切り裂く、方向転換しまた切り裂くそれを数回繰り返し無人機がよろけた所に両足のミサイルを一斉発射、対物ライフルを展開し頭部を狙う。

ミサイルをくらいさらによろけた所に対物ライフルで頭部を撃ち抜き頭部を完全に壊す。

無人機は目である頭部を潰されたことで出鱈目にビームを乱射し始めこちらが見えていないことが丸わかりだった。

「オワリダ」

大型ビームブラスターを展開両手で構えながらスライディングの要領で足元に滑り込み銃口を腹部に押し当て最大出力で砲撃した。

無人機は腹部から融解し胴体と下半身が2つに分かれた。

「はぁ…はぁ…」

短時間とはいえエンゲージを使用したことによりかなりの疲労がどっときた。

「さてと」

胴体の残った部分にブレードを突き立て切り開きＩＳコアを露出させ、コアを摘出する。束が作ったコアには違いないからな本人に返すのが1番だ。

そのあとハッキング装置を回収し無人機の残骸を回収しようとした時無人機から電

子音が鳴っていることがわかった。
「自爆かよ!?」
慌てて腕でも回収しようとしたが腕からも鳴っているのがわかり急いで施設を脱出した。

＊

「大丈夫?!みっくん!!」
「大丈夫なんであんま抱きつかないで下さいよ」
「えーーー」
「本当に大丈夫ですか？湊様」
「大丈夫、医療ポッドに少し浸かればすぐ治る」
多少怪我はしたが束博士お手製の医療ポッドとナノマシンのおかげでこのくらいならすぐ治るのだ。やはり天災は腐っても天才といくことだ。
「それよりもみっくん大変なんだよ！あいつらの目的がわかったの！」
「どうしたんです？」
「抽出したデータを見たらあいつらＩＳ学園に襲撃をかけるみたいなの！専用機が目当

てみたい！」
「戦力を更に増強するつもりのようです。そこには束様の妹様、と親友のちーちゃん様と弟のいっくん様がいますので束様は大慌てなのです」
「そうなんだよ！このままだといっくんが危ないんだよ！」
　確かにいっくん…織斑一夏には倉持に残してきた束が少し手を加えて完成させた白式を倉持からの専用機ということで渡してきたらしいのだが一夏は初心者なので無人機の相手は辛いだろう。
「でも学園には他にも専用機持ちはいるだろ？１機なら問題ないはずだが」
「４機…」
「え？」
「４機の無人機が向かってるの！」
　それは不味い、あの強さが４機だと最悪死人が出る可能性がある。
「束博士、すぐにＩＳ学園に向かってくれ。俺がやる」
「もう向かってる！みっくんは医療ポッドで少しでも身体を癒して」
「それじゃ間に合わないんじゃ…」
「運がいいことに今日のクラス対抗戦で消耗したところを狙うみたい、だから時間は少しだけどあるんだよ」

「わかりました、しばらく篭ります」
そう言って俺は医療ポッドにはいりに行った。

「やっぱりこれを使うことになっちゃうのか…」
「ですが、こうなってしまったのではもう…」
「わかってるよクーちゃん…使わないのが１番なんだけどね…」
そう話す２人の前には１つの灰色のＩＳ、全身装甲のＩＳがそこにあった。
「戦闘用ＩＳ…使い方を見誤らないでねみっくん」

＊

簪視点
今日はクラス対抗戦の日、私も４組の代表として出る。
今は１組と２組の試合をモニターで観戦している。
「湊に見て欲しかったなぁ…」
高校生になっての初試合、緊張もあるが好きな人に見てもらいたいという気持ちが大

きい。

「まずは勝つ、そうしたら湊は褒めてくれるかな」

だがその前にやることがある。

「返事…だよね」

そう、それが問題なのだ。そもそもいつ湊が戻ってくるかもわからない、もしかしたらこのままずっとということも…。

「ないない絶対ないうん」

そんな思いをしながら試合開始を待っていた。

黒い影が迫っているとも知らずに…。

第６話

クラス対抗戦第一試合、１組ＶＳ２組の試合は決着寸前だった。
「はあぁぁぁぁぁ!!」
「しまっ…」
最初の男性操縦者の織斑一夏が白式の零落白夜を発動させ、中国代表候補生の凰鈴音を今まさに切り裂こうとした瞬間だった。
上空から高出力のビーム砲が降り注ぎ一夏と鈴は慌てて回避を行った。
「なんなんだ!?」
一夏と鈴は上空を見上げる。
そこには両腕が肥大化した黒色の全身装甲のＩＳ、無人機が４機いた。
「一夏、あんたシールドエネルギーはどのくらい残ってる?」
「零落白夜のせいであまり残ってない…」
「ならあんたは撤退しなさい…あのビームを今くらえば下手したら絶対防御を抜いてくるわよ」
「鈴はどうするんだよ!?」

「あたしは回避優先で相手の注意を引く、教師陣が来るまで観客の生徒を守らなきゃ…」
『織斑、凰、聞こえるか？』
　そこに織斑先生から通信がはいる。
『あの正体不明機が攻撃を仕掛けたと同時に学園にハッキングがかけられアリーナ内の全てのロックが掛けられた。観客の避難と教師陣の突入ができない状況だ』
「そんな…」
「マジかよ…」
『…お前達生徒にこんな事を頼むのは教師失格だろう…だが頼む。ハッキングを解除し教師陣の突入まで持ち堪えてくれないか……？』
　織斑先生の頼み、いつもの威厳たっぷりの態度はなく申し訳なさがヒシヒシと伝わる通信だった。
　姉を慕ってる弟と弟の幼馴染、そんな２人にはこの頼みを断るなんて選択肢はなかった。
「任せてくれ、千冬姉。やってみせる」
「一夏、あんたは気をつけなさい。フォローしてあげるから、千冬さん任せてください」
『すまない２人とも…』
　無人機の２機がこっちに降りてくる、１機は観客席に向かおうとしてブルーティアー

ズを纏ったセシリアに狙撃されて戦闘開始、もう1機はアリーナのピット内に突っ込んでいった。
「あっちには千冬姉達が!!」
『今待機中の４組のクラス代表から連絡があった。迎撃するそうだ』
「大丈夫なのか!?４組の人って専用機じゃないんだろ?!」
「４組のクラス代表も代表候補生らしいから信じるしかないわ…今はそれより…こっちの対処よ」
「鈴どうすればいい?」
「普通なら各個撃破が定石なんだけどあんたのＳＥがね…。相手の武装もあれだけとは限らないし…あたしが前で２機の相手をするから相手の武装を把握しなさい、攻めるならその後よ。いい?ワンミスで落とされるから気をつけなさいよ」
「わかった、鈴こそ気をつけろよ」
「あたしは代表候補生よそう簡単に落ちないわ!」
そう言って鈴は2機の無人機に向かっていく、その後ろを付いていくように一夏が向かう。
無人機達との戦いが始まった。

＊

医療ポッドから出た俺が最初に見たのは束とクロエが灰色の全身装甲のＩＳを弄っているところだった。手元のコンソールにはグレイゴーストの待機形態のチョーカーが接続してある。

「何をしているんだ？」

「グレイゴーストの強化だよ、前々からグレイゴースト自身から強化のお願いがあってねそれを今してるんだ」

「じゃあなんで今なんですか？その様子だと既に完成していたみたいですが…」

「それはね…この子は戦闘用なんだ…」

「戦闘用…」

「そう、既存のＩＳはまだ私の理想のパワードスーツの範疇だった。でもあの無人機は戦闘のことしか考えてないからこっちも本気で対処しなくちゃいけないの、本当は使いたくなかったんだけどね」

確かに今のままのグレイだときつい、１体相手にあそこまで消耗したのだから４体だと恐らく負ける、ＩＳ学園と共同戦線で勝てるというところだろう。

「束様、終わりました」

「ありがとうくーちゃん」
　インストールが終わったようでクロエが束に報告する。
「さぁみっくん！グレイゴーストに乗って、後は細かな調整だけだから！」
　一旦量子化しグレイを纏う。
　そのまま束博士が調整する、グレイも手伝っているようですぐに終わりそうだ。
　ー湊、勝手に頼んでいたのはすみませんでしたー
「気にするな、いつかは必要だっただろうしな。というか話すの上手くなった？」
　ー束様が調整してくれましたー
「流石だな」
　そんな話をしてると作業も終わり、グレイを一旦解除したのだが…。
「どうしました？」
「グレイ？」
「はい」
　俺の肩に２０ｃｍくらいの大きさのＩＳを纏ったような女の子がいた。
　灰色髪のロング、黒の軍服のようなものを着込み頭にヘッドギア背中に機械の翼が付いている。
「おー！まるで人間みたいだー！」

束博士はそう言ってグレイの頭を撫でている。
「なんでこうなったんですか？」
「コア２つあるから待機形態もでかくなるかなーって思ってたんだけどね。まさか人間と似たような待機形態になるとは思わなかったよー」
「コアが２つ？」
「うん、２つ」
グレイを見るとコクリと頷いている。
「…あー」
大変な事になった。
「そうでもしないとエネルギー足りなくなるからね、さぁ早速ＩＳ学園に向けて出撃だ！」
「まだ距離あるよな？どうする気なんだ？」
「それはこの人参ロケットで！」
「湊様を打ち出して」
「弾道ミサイルの如くＩＳ学園に行きます」
「あたまわるい」
作戦名人間ミサイル。

＊

「山田先生！アリーナのロックはまだ解けないのか！」
「ダメです！全然間に合いません！」
あれからハッキングを止めようと試みているが成果は芳しくない、このままではまだ時間がかかるだろう。
「クソ！」
自分の不甲斐なさに目の前のコンソールを叩く、現場指揮を取らなくてはいけない都合上この場を離れることができず、そのせいで生徒達に時間稼ぎを頼んでしまっている。
モニターには正体不明機と戦う一夏達が映っているが戦況押され気味でこのままでは敗北するのが目に見えている。しかもあれから通信が繋がらなくなってしまっている。
「何か手はないのか…」
そんな時だった。
『ＩＳ学園、聞こえますか』

男の声で通信が入った。
『２０秒後アリーナのシールドを一瞬解除して下さい、戦線に加わります』
「誰ですか?!何故通信ができるんですか?!」
『頼みます』
その言葉を最後に通信が切れてしまった。
「山田先生２０秒後アリーナのシールドを一瞬解除、その後すぐに再展開だ」
「いいんですか??!!誰かもわからないんですよ?!」
「私が責任をとる、それにおそらくやつは山田先生も知っている人物だ」
「私も知ってる…まさか!?」
「ああ…」
頼むぞ、グレイゴースト…いや高見沢。

＊

「たあぁぁぁ!!!」
打鉄のブレードで正体不明機に斬りかかる。だけど身体を捻って難なく避けられてしまい腕で叩かれ壁に衝突してしまう。

「あぐっ……」
更に腕の殴打の追撃でアリーナとピットの間まで吹っ飛ばされてしまった。
「この!!」
倒れたままライフルを展開して攻撃、だけどダメージが入ってる様子はない。
おそらく今の打鉄じゃ倒せない、追加パッケージの大火力があれば倒せるかもしれないけど…。
「時間稼ぎをしなくちゃ」
教師陣が来るまでの時間を稼がなくてはいけない。いつ来るかわからないけれど…。
正体不明機が両腕を上げてこちらに照準を向けてきた、やばい。
アリーナとピットの間なので横幅が狭い、つまり…。
「っ!!」
私は咄嗟に後ろに逃げた、けどあと１歩遅かった。
「きぁあああぁぁぁぁ!!!!」
背中をビームが焼く、私はそのままアリーナに落下してしまう。
アリーナには織斑一夏と凰鈴音とセシリア・オルコットが同様に落とされて倒れていた。
私が相手していた正体不明機が降りてくる、立ち上がってブレードを構えて最後の抵

抗を試みるが数は４機しかもほぼ健在、勝ち目や時間稼ぎも出来る状況ではなかった…。

「湊…」

もう一度でいいから会いたかった。時間が少なすぎる。返事もしてない…。

正体不明機がビーム砲を向けてくる。

「助けて…湊…!!」

その時アリーナのシールドが一瞬解除されそれと同時に何かがアリーナ内に侵入してきて正体不明機４機にビームによる攻撃をした。正確に腕を狙って。

そしてそれは私の前に降りてきた。灰色の全身装甲、右手にさっきのビーム攻撃であろうロングライフル、右腰にコンバットナイフ、背中には大型のビーム砲を装備したＩＳでした。

「無事か！簪！」

その声は私が今、最も聞きたかった声でした。

「湊…！」

「すぐ片付ける、待っててくれ」

そう言って目の前の正体不明機に向かって圧倒的な加速力で迫っていく。
やっぱり私にとってのヒーローでした。

＊

「ぶっ潰す」
まずは近くにいた無人機Ａにロングライフルを撃つ、相手はビームを撃ってくるが全て最低限身体を動かして回避、こっちの攻撃は全て当てる。
新しくなったグレイはとても扱いやすい戦闘用というだけある。
連続で攻撃を当てよろけたところに瞬間加速で一気に近づき右手に前のグレイでも使ってた大剣を呼び出し首付近に突き刺す、引き抜きバックパックのブラスターを一つ左脇の下から通して展開、２発放ち無人機を爆散させる。
威力がヤバいなあの防御力のうえからぶち抜くか、あとで束博士にお礼を言っておこう。
「次！」
後方からのビームを回避しつつ無人機Ｂに近づく無論個別瞬間加速で不規則に曲がりながらでだ。

コンバットナイフを引き抜き、右の大剣と左のナイフで縦横無尽に切り刻む、無人機CDがこっちにビームを放ってくるが無人機Bを蹴っ飛ばして盾にする。更に後ろから背面ブラスター2門を脇下から通して展開こっちも無人機Bを狙う、無人機Bはビームの本流に耐え切れず爆散、俺は爆煙に突っ込み無人機Cに不意打ちを仕掛ける。

無人機Cは右腕を振り下ろして迎撃してくるが大剣で受け流してその勢いを利用して回転、勢いに乗せたまま大剣を振り下ろし右腕を切断する。そのまま切り返し首を切り落とす。首の断面に剣を突き立て内部のコアを破壊する。

残りは無人機Dだけとなった。

「ラスト」

無人機Dを倒そうとしたら無人機Dはアリーナ内に倒れている簪達にビーム砲を向けた。

「ふざけんなぁ!!」

簪達の前に割り込みビームを防ぐために大剣を盾にして誘爆を防ぐために後ろのブラスターもパージする。

無人機Dは最大出力でビームを放った。

「がああああああ!!」

「湊!!」

大剣はすぐに融解し腕の装甲も融解を始める、グレイからもアラートが鳴り止まずＳＥがゴリゴリ削られていく。
ビーム砲の砲撃が終わりそこにいたのは両腕が焼けただれ頭部のパーツは吹き飛び顔が露出、そのほかも全身ズタボロのグレイゴーストがいた。
無人機Ｄも高出力で撃ったため腕からはスパークが発生しゆっくりとこちらに歩いてくるのがやっとの状態だった。
（マッズい）
身体が動かない、搭乗者保護機能で痛みは和らいでいるとしてもおそらく神経がやられてるのが腕が動かない、バックパックのスラスターも誘爆しておりＰＩＣを使ってギリギリ浮ける程度しか出来ないだろう。
やがて無人機Ｄが目の前まで接近し腕を振り上げる、どうにかして動こうとするが身体が言うことを聞かない。
（ごめん、簪）
目を閉じて諦めた…。

いつまで経っても痛みが来ない？

目を開けると目の前には白いＩＳと赤いＩＳに両腕を抑えられている無人機Ｄだった。

「大丈夫か!?」

「あとはあたし達に任せなさい!!」

データ照合、織斑一夏と凰鈴音か、後方にはスナイパーライフルを構えたブルーティアーズ、セシリア・オルコットとパージしたブラスター１門を拾って構えている簪がいた。今できる最適な行動は…。

「そいつは無人機だ、思い切りやれ!!」

「それなら！」

「遠慮はいらないわね!!」

一夏と鈴は背負い投げの要領でセシリアと簪さんに向けて投げる。

「狙い撃ちですわ!!」

「これで!!」

「衝撃砲も持っていきなさい!!」
３人の砲撃が全て当たり無人機Ｄは木っ端微塵に爆発した。
簪がブラスターを置いてこっちに飛んでくる。
「よかった…」
そう言っているがさっきの叫びで力を使い果たしたのか俺は前のめりに倒れた。

＊

「湊!!」
私は慌てて湊の身体を支える。
「湊!!湊!!お願い返事して!!」
「大丈夫よ更識さん、呼吸はしてる気絶してるだけみたいだから安静にしてあげましょ」
「本当…?」
「そのようです、呼吸の乱れもあまりありませんし搭乗者保護機能でなんとかなっているようですわ」
「俺、千冬姉を呼んでくるよ!」
３人とも湊を心配してくれている、織斑君については織斑先生を呼びに行ってくれ

た。
「なんで…みんな…」
「なんでってこいつはあたし達を助けてくれたでしょ?こんなにボロボロになってまでね」
「助けるのは当然ですわ、貴族としてではなく人としてですわ」
「ありがとう…」
私は湊を抱きしめて織斑先生の到着を待った。
その後湊は医療班に運ばれてこの事件に関して後日改めて事情聴取するとして幕を閉じた。

第７話

グレイ「湊」
誰かが呼んでる…。目を開けると人間態のグレイが目の前にいた。
どうやら対話空間にいるらしい。
グレイ「湊…大丈夫ですか？」
湊「ああ…大丈夫…かな。４機目が破壊された後わからないけど」
グレイ「簪様と千冬様が治療室まで運んでそのまま治療され今はベットで眠っています。両腕の火傷が１番ひどいですがそのほかはすぐに治るでしょう、腕は全治１週間というところです」
ＩＳの登場は医療技術にも影響を与えている。ＩＳの保護機能などを解析し医療技術はこの１０年ほどで飛躍的な発展を遂げている、１００年以上の技術力の差があるそうだ。
グレイ「…すみません。サポートが出来ずに」
湊「やっぱりリンケージできてなかったか…」
グレイ「更なる調整が必要です、その前に修理ですが…」

あの戦闘中グレイの声が全く聞こえなかった。それに個別瞬間加速の際の負荷もいつも以上だった。グレイゴーストの調整不足でリンケージができない状況だったのだろう、そんな中でグレイには無理をさせてしまった。

湊「簪達は？」

グレイ「簪様は今もベットの側にいます」

看病してくれてるのかな。ならさっさと起きよう。

湊「起きても大丈夫？」

グレイ「大丈夫です、何かあれば私が保護機能で緩和しますので」

湊「ありがとうグレイ」

そして俺は意識を覚醒させた。

＊

意識が戻った時最初に感じたのは左手を握られてる感触、握るというよりそっと添えられてると言った方がいいか。握り返そうと指を動かすが痛みであまり動かせなかったがそれに反応したのか添えられた手がビクッと反応した。

ゆっくり目を開けると水色の髪の女の子が見えた。

簪「起こしちゃった？」
湊「ああ起こされた」
簪「えへへごめんね、でも心配したんだよ？」
湊「それはごめん、かっこよく出てきたのにこのザマだよ」
簪「そんなことない。ヒーローみたいでかっこよかった、湊はみんなを救ったヒーローなんだよ？胸を張らなきゃ」
ヒーローと言われて胸がチクリと痛んだ。
湊「俺はそんなんじゃない…、俺はあれから何人も殺してる、正義の味方にはなれない」
簪「それでも湊は私にとってヒーローと同じだよ、私を助けてくれた。弐式の事、お姉ちゃんの事、そして今回の事」
湊「…」
簪「例え皆んなが湊を非難しても私だけは絶対に湊の味方だよ」
湊「ありがとう…簪」
簪「うん…。だって私は…」
簪はそのあと口籠ってしまい顔を赤くして顔を背ける。しばらくそのまま時間が経ちやがて決心したかのように頷きこちらを見つめてきた。

簪「私は湊が好き。私をしっかり見てくれた認めてくれた、そして命を掛けて私を守ってくれたそんな湊が好き。これから私を守ってください、そして私にも守らせてください」

簪の精一杯の告白、顔を赤くしているが目には決意が宿っている。

湊「ありがとう簪…俺も好きだよ。愛してる」

簪「愛…／／／うん、私も愛してる／／」

そのまま甘々な空間を作りながら消灯時間まで過ごした。

訳もなく

グレイ「湊、簪様皆さんお待ちです」

湊、簪「「ひゃい!!!」」

仕切りのカーテンをジャラっと開けながらグレイが顔を出した。その後ろには織斑

先生、山田先生、織斑一夏、凰鈴音、セシリア・オルコット、そしてポニーテールの女性がいた、束博士の妹自慢で写真を見せられた事があるので覚えている篠ノ之箒だ。

鈴「あっちょっといいところだったのに！」

セシリア「そうですなんで行ってしまいますの!!」

グレイ「湊と簪様を見世物にしたくありませんでしたので」

鈴、セシリア「「主人想いのいい子だ!!」」

鈴とセシリアはグレイに詰め寄っている、ところでグレイに関してはもう知っているのだろうか？

一夏「？なに盛り上がってるんだ？」

箒「一夏、流石に気付いてくれ…」

一夏「？」

一夏と箒はうんまぁ頑張れとしか…。

千冬「更識妹、交際は別に咎めないが学業に支障は出すなよ？それなら好きにして構わん。高見沢も分かったな？」

真耶「えーとその／／更識さん不純異性交遊は駄目ですからね？……いいなぁ」

千冬「…山田先生」

真耶「すみません…」

教師２人に注意をされたが咎められる事はないみたいだ。
ところで簪から反応がないみたいだが…。
簪「はううう／／／／／／」
顔から煙が出るくらい恥ずかしがっていた。
それまでは良かったのだがその反動で簪は強く手を握ってしまった。痛みでまともに動かせない俺の手を。
湊「あああああああ!!!!」
俺の絶叫が響き渡った。

＊

あれから事情聴取をされ今回の事件の事を話し合った。
まず、俺の正体はここにいる人達しか知らないということ、俺が突入時点で避難がほぼ完了しており目撃者がいなかった。箒は織斑先生のところにいたので目撃してしまったとのこと。
次に無人機について、これは俺から説明した。女権団が作ったものである事、束博士が作ったコアではなく新造のコアを使っている事、専用機並かそれ以上の性能がある事

を伝えた。
最後にグレイの事を言おうとしたら、既にグレイ自身から説明を受けていたらしく皆認知してくれてるとのこと。専用機組から自分たちのＩＳもこうなる事は出来るか？と聞かれたので信じてやれと言っといた。
千冬「さてこんなものか、それと高見沢すまないが寝る場所を移したい生徒共がくる可能性もあるからな」
湊「いいですけど何処に移動ですか？」
千冬「学園に在学した時用に寮に部屋を用意してあるのでな、そこに移動だ」
湊「そうですか、なら宜しくな織斑」
一夏「え？俺の同居人箒だぞ？」
湊「え？男同士じゃないのか？」
千冬「それはだな、入学前から強い希望と生徒会長からの推薦でその人と相部屋ということになっているんだ」
湊「まさか…」
するとおずおずと簪が手を挙げる。
簪「私です…」
千冬「…という事だ」

湊「…はい」
周りからの視線が痛いです。
その後、皆んなからの提案もあり名前で呼び合うようになった。優しい人に会えて良かったと思った。生暖かい視線がむず痒いけど。

＊

「作戦は失敗か」
「ええ、まさか灰色の亡霊が来るのは…」
「だが同時に弱点も分かった」
「弱点？」
「あいつらをほっとけないという事だよ」
そう言うとディスプレイに専用機組を庇うグレイゴーストが映される。
「ＩＳ学園を攻めればあいつは必ず来る、不利な状況でも必ずな」
「なら…」
「量産体制を整えよ」
「かしこまりました」

???「さて、あのシステムもテストしなくてはな」

ディスプレイに映されるのは黒いＩＳ、そして共に映る禁忌とされるシステム名。

ＶＴシステム

第8話

無人機襲撃事件から一夜明け、次の日の朝を迎えていた。
簪の部屋に移動しそのまま疲れで眠りについた。簪のベッドとは違うベッドに寝たはずなんだが…。
簪「すぅ…すぅ…」
なんで隣で寝ているんだ。
グレイ「湊、おはようございます」
グレイが机の上から浮遊して側まで飛んできながら挨拶してきた。
湊「グレイ、簪がここにいる説明を」
グレイ「湊が寝たあと忍び込んでました」
湊「何故…？」
グレイ「本人に聞いてみては？」
湊「だよなぁ…。おーい簪、起きろー」ユサユサ
腕が動かし辛いのでグレイに揺すってもらう。
簪「んっ…んんっ……」

なんだろう…なんか…。
グレイ「湊、興奮してますか？」
湊「待て、何処でそんな事覚えた!!」
グレイ「束様が覚えといて損は無いと」
湊「今度会ったらぶっとばす」
戦闘用ＩＳにしてくれてありがとう束博士、きつい一撃お見舞いできそうです。
簪「んっ……？湊…？」
そうこうしてたら簪が起きた。
湊「おはよう簪、早速で悪いけどなんで俺のベッドにいるの？」
簪「えーと…その…」
湊「？」
簪「不安だったの」
簪は頭を肩付近にコテンと乗せてきた。腕が痛くならないようにしながら。
簪「またいなくなっちゃうんじゃないかって思って…、寂しくて不安になって気づいたら同じベッドに入ってた」
確かにあの後すぐ束博士のところに向かったからな。何も言わずに行ったから寂しい思いをさせてしまったようだ。

湊「暫くは学園にいるつもりだからそれまではずっと一緒にいるから」
簪「本当？」
湊「本当、グレイ保護機能使って」
グレイ「了解しました」
保護機能を使って腕が痛まないようにしてから簪の頭を撫でる。簪は目を瞑って幸せそうにしている。
簪「ありがと湊」
湊「どういたしまして」
暫く頭を撫でながらゆっくりしながら朝を過ごした。
その後保護機能で誤魔化してた痛みに悶えることになったが。

＊

千冬「高見沢、更識、今大丈夫か？」
朝１０時、部屋で簪にご飯を食べさせて貰っている時織斑先生が訪ねてきた。
因みに昨日の襲撃事件を考慮して追加で休みを増やし３日間の休みが貰えたらしいので簪はこの時間でも部屋にいて俺の世話をしてくれている。

保護機能使って食べようとしたのだが簪が断固拒否したのとグレイが了承したことによって食べさせて貰うことになった。

千冬「すまない、邪魔した」

簪「大丈夫です！大丈夫ですから！」

慌てて簪が引き止める、用事があるなら今聞いたほうがいいのだけど気まずいな…。

千冬「…そうか？なら…束が来ている」

簪、湊「「ええ!?」」

何してんのあの人!?

千冬「何やら渡すものがあると言っていたのでな、学園東にある港に来てくれ食べた後でいい。ノックの後すぐ入って悪かった」

湊「あ…いえ大丈夫なんで気にしないでください」

千冬「すまないな、後で束から何を貰ったかわたしに報告してくれ手続きもあるのでな」

そう言って部屋から出て行った。去り際に仕事が増えた…と言っていたのが聞こえた。後日差し入れを持って行こう。

簪「鍵かけておかなきゃ…」

湊「そうだね…」

鍵をかけてご飯を再開した。

食べ終わり俺と簪とグレイは港に来ていた。
そこには何故かエンタープライズが停泊していた。
簪「カッコイイ!!」キラキラ
簪は目を輝かせてエンタープライズを見ていた。アニオタ魂に火がついたか。
湊「簪、とりあえず入ろ「うん!!」おっおう」
食い気味に返事を言われて朝とのギャップにびっくりする俺だった。

エンタープライズ内に入るとクロエが出迎えてくれた。
クロエ「湊様大丈夫ですか?」
湊「大丈夫だ、1週間もあれば治るそうだ」
クロエ「重症じゃないですか!」
湊「大丈夫だって」
クロエは俺が怪我をして帰るといつも心配してくれる。今回はいつもより酷かったためこんな感じになっている。

簪「グレイ、この人は？」
グレイ「クロエ・クロニクル、束様の助手です」
簪「束博士の助手…すごい人なんだね」
グレイ「助手の前に大事な家族ですね」
簪「家族？」
グレイ「束様にとっての大事な人だと思って下さい」
簪「大事な人…」
簪は大事な人と聞いて真っ先に湊の顔が浮かんだ。
簪「絶対守るから」
グレイ「私も守ります」
そのあとクロエが落ち着くまで簪達は見守ることにした。

束「遅ーい!!!」
研究室に入ると怒っている束博士がいた。
束「遅いよ！館内に入ってからどんだけ経ってるのさ!!」
確かに入ってから２０分は経っているけども。
湊「すみません束博士」

束「やだ」
湊「束博士？」
束「いっくん達が名前で呼ばれてるから私も呼んでくれなきゃやだ!!」
めんどくさいモードに入ってしまった。こうなると中々戻ってくれない。
湊「はぁ…、機嫌直してください束さん」
束「うーんまぁいいよそれで♪」
要求を聞けばすぐ戻るけどな。
簪「この人が篠ノ之博士…なんか…」
湊「イメージと違うだろ？」
簪「うん…」
湊「大丈夫１００人中１０００人が違うって言うから」
束「９００人オーバーしてるよ！みっくん!!」
湊「で渡すものってなんですか？」
束「むむむ、みっくんが意地悪だ。まぁ渡すものなんだけどねまずはこれだよ」
そういうと、後ろのＩＳ用ハンガーに視線を誘導する。
そこには水色の全身装甲のＩＳがあった。
両腕についたダブルガトリングと背中にシールドのような形のものが付いている。

束「この子の名前はジャベリン！両腕についたダブルガトリングと足に内臓されたミサイルで制圧、更に弐式の試作第３世代兵器「山嵐」を完成させて搭載、近接兵装は先端からビームを発振させるビームジャベリン、主に遠距離で力を発揮するＩＳだよ」

湊「束さん、これって簪の…」

束「うん、かんちゃんのＩＳだよ！」

俺が作らなきゃいけないと思っていたのだが、束さんが完成させていたとは。

簪「なんでそのあだ名を…」

束「弐式に聞いたらかんちゃんってあだ名があるって教えてもらったの」

湊「でもよかったな簪、束さんが認めてくれた証だぞ」

簪「そうなの？」

湊「気に入った相手はあだ名をつける、そして家族のように大事にする。それが束さんのやり方だ。ただそれ以外にはゴミを見るような目になるけどな」

簪「えぇ…」

束「さぁさぁ早速乗って乗って♪」

簪「えっあっ！ちょっと…！」

そして簪は瞬く間にジャベリンを装着させられた。
簪「……」
クロエ「簪様？」
湊「おそらく対話してるんだろう、ジャベリンと」
グレイ「でしょうね」
束「その前にみっくんとグレイゴーストとの対話空間に干渉したことあるからね、素質はあるからねー」
数秒後ジャベリンを解除して簪が戻ってきた。
簪「ごめんなさい！長い時間待たせました…」
湊「大丈夫だよ大体５秒くらいだったからな」
簪「え？でも２時間位は話してたと思ったのに」
???「だから言ったじゃないですかーそんなに時間経たないから大丈夫だよーって」
声がしたと思ったら簪の頭の上にグレイと同じようにＩＳ人間態ちょこんと座った。
水色の髪のロングでグレイのような翼はなく、代わりに全身に簡易アーマーのようなものが付いておりサイバー戦士を彷彿とさせる見た目をしている。（見た目はＺ／Ｘのソードスナイパーリゲルの髪を水色にしてバーニアを無くして少し幼くした感じです）
簪「あれ？もしかしてジャベリン？」

ジャベリン「そうですよー！簪！」
束「ほーう、やっぱり待機形態はこうなるのかなー？」
クロエ「可愛らしいですね、ＩＳによって差があるのですね」
グレイ「久しぶりですね弐式…いやジャベリン」
ジャベリン「久しぶりー！グレイゴースト!!」
ジャベリンがグレイに抱きつく、クールなグレイと天真爛漫なジャベリンと言ったところか。
グレイ「こうして抱き合うというのはいいものですね」
湊「どうした急に」
ジャベリン「こんな機会ありえないからね！グレイも憧れていたみたいだよ？」
グレイ「昨日簪様が抱きついているのを見てどんなものかと思っておりました」
湊「昨日？」
簪「へ？……あーーわわわ／／／／」
昨日？確か無人機事件の日だよな？抱きつかれたっけ？
束「みっくんみっくん、これ」
束が手持ちのディスプレイに映してくれたのはベッドで寝ている俺に優しく抱きつく簪だった。

簪「なんであるんですか!!!」
束「束さんに不可能はない!!」
簪「消して!!」
湊「グレイ、保存」
グレイ「了解です」
簪「湊!!!」
顔を真っ赤にして慌てふためく簪が可愛くてつい乗っかってしまった。
束「そうそうまだ渡すものあるからね」
湊「あとはなんですか？」
束「エンタープライズ」
湊「え？」
束「エンタープライズ」
この飛空挺をくれるそうです。
ＩＳ学園にまた攻め込んでくる可能性が高く、それなら拠点ごとここに置いてしまったほうが防衛や整備もしやすいだろうということだそうな。
因みに束さんとクロエは他のラボに籠もって研究を続けるそうだ。支援は出来る限りするとのこと。

操縦はグレイかジャベリンにリンクさせておくから2人に任せれば動かせるそうだ。
束「渡すものは以上！あとはグレイゴーストを整備して終わりだね」
湊「俺も手伝いますよ、簪ももう一回装着して慣らしたほうがいいぞ」
簪「うんそうする、ジャベリン」
ジャベリン「はーい!!」
クロエ「お手伝いします」
その後全員で整備や修理を行い1日が終わった。
織斑先生に報告したら頭を抱えたあとエンタープライズへ直行、およそ女性の声とは思えない叫び声が学園中に響いた。

第9話

休み2日目朝から俺と簪は寝不足でフラフラしていた。
簪「あの後部屋でも調整をしたのがいけなかった…」
湊「眠い…」
2人揃って部屋でボケーっとしている、因みに腕は昨日束がナノマシンだよーって言って身体に注射器刺したら身体の傷が次の日には少し痛む程度までは回復した。簪は少し惜しいという顔をしていた。
その近くでグレイとジャベリンは2人で話し合っていた。
ジャベリン「湊様って前からあんな性格でした?もっと暗かったような」
グレイ「簪様のおかげかもしれませんね」
ジャベリン「簪の?」
グレイ「近くに安心できる方がいて本来の優しい湊様に戻ったのでしょう。ずっと気を張っていたからその反動もあるのでしょうね」
ジャベリン「じゃあ私達も頑張らないとねグレイ!」
グレイ「はい」

ＩＳ２人は主を守るために決意を新たにしていた。
簪「そういえば湊、連絡先交換してなかったよね？しない？」
湊「連絡先…？」
簪「うん」
湊「持ってない」
簪「え？」
湊「だから…持ってないんだ…ごめん」
簪は一瞬呆気にとられたあとスッと立ち上がった。
簪「買う」
湊「何を？」
簪「湊の携帯買う!!」

＊

ＩＳ学園から少し遠出したところにある大型ショッピングモール「レゾナンス」に簪と２人で来ている。
簪「今思うと…デートだよね」

湊「だな…」

簪、湊（（緊張する…））

初めてのデート（俺にとっては友達と一緒に出かけること自体初めて）なので2人揃ってガッチガチに緊張してしまっている。

因みに俺は一応サングラスをかけている、一夏程ではないが報道されて顔が出てしまっているのでその対策だ。

簪のコーディネートは白のドットブラウスに茶色のトレンチスカートという可愛らしい服装である。可愛い。褒めたら小さくガッツポーズしてた。可愛い。

グレイ達は申し訳ないがバックの中で待機して貰っている、たまにひょっこり顔を出しているから楽しんでいると思う。

簪「とりあえず携帯ショップに行こうか？」

湊「何もわからないから任せるよ」

簪「わかった」

簪について行きながら辺りを見渡す、昔住んでいた場所にはこんな大きなショッピングモールは無かったので大勢の人にはあまり慣れない、下手したら迷いそうだ。

湊「簪」

簪「？」

湊「手…繋がないか？」
簪「……えっ?!」／／／／／／／
湊「えっと…逸れるかもしれないから…」
簪「うっうん…」／／／／／
ぎゅっと手を繋ぐ、まだ少し腕が痛いけど我慢我慢。
簪「行こっか…」／／／／／
湊「ああ…」
グレイ「良いものですね」
ジャベリン「簪頑張れー！」
優しく見守るグレイ達であった。
それから少し歩いて携帯ショップに到着、簪に任せて携帯を購入。因みに金は束から報酬として中々な額を貰っているので心配ない。銀行口座がないから現金で貰ったのだが量が多いためエンタープライズの倉庫に置いてある。
携帯を見せて貰ったら簪とお揃いの最新機種だ。渡してくる時お揃いだねって言ってくれたのが最高に可愛かった。
簪「あ…」
その後も折角だからとレゾナンス内を散策していると不意に簪が足を止めた。

視線の先にはプラモデルショップ、ああなるほど。
湊「寄ってく？」
簪「いいの？」
湊「おすすめ教えて」
簪「うん!!!」
プラモデルショップに入り主にガ〇プラを中心に見て回る、プラモデル初心者にはガ〇プラがお勧めらしい。
女尊男卑の影響でガ〇ダムシリーズも終わる危機が来ていたらしいのだが、俺が衰退させたおかげで終わらずに済んだという。
簪「初心者にはこれお勧め、「A〇E―1ノーマル」組み立てやすい上に可動域が神」
湊「シンプルな機体だな」
簪「初代ガ〇ダムを意識してるからね、どういうのがいいの？」
湊「大剣や大型の銃持ってるやつある？」
簪「ダブルオーガ〇ダムセブンソード／Gとかパーフェクトストライクガ〇ダムとかどう？」
湊「いいかも、どっちか買おうかな」
簪「どっちも買っちゃえば？なんなら手伝うし」

湊「簪はどれ買うんだ？」
簪「私はこれ」
そう言って簪は棚からヘビーアームズＥＷ版とフルアーマーユニコーンガ〇ダムのガ〇プラを取り出した。
簪「ヘビーアームズはジャベリンとコンセプトが似てるから、フルコーンは全部盛りはロマンだから」
湊「全部買うか！」
簪「オーライザーも買ってダブルオーライザーセブンソード／Ｇを作ろう！」
こうして２人で計６個のガ〇プラを購入し学園への帰路についた。
今夜も２人で徹夜して寝不足になったのは言うまでもない。

簪「あ、連絡先交換してない」
その日のうちに交換しました。

＊

休日最終日、織斑先生に呼ばれ寮長室にお邪魔していた。

湊「綺麗ですね流石です」
千冬「まぁな」（昨日一夏に掃除して貰ってよかった…）
湊「一夏に掃除してもらいました？」
千冬「ギクッ」
湊「コアネットワークの情報全部わかるんで織斑先生が私生活壊滅的なのも知ってます」
千冬「生徒には黙っていてくれ」
湊「わかってますよグレイもいいな？」
グレイ「了解です」
冷や汗をかきながら平静を装ってお茶を飲む織斑先生。
湊「で、用件はなんでしょうか？」
千冬「ふー…、２つある」
大きく息を吐き落ち着かせてから真面目な顔になり言ってきた。
千冬「まず束から連絡があった。女権団からの防衛の為ＩＳ学園に在学することになったのは知ってるか？」
湊「拠点をここに置くのは聞いていましたが在学するのは聞いてませんでした」
グレイ「湊には伝えてませんね」

千冬「はぁ…あのバカは…、お前は病気で療養中ということにしてクラスメイトには説明してあった。クラスは1組、織斑と同じにしろと上の連中が煩くてな…」
湊「わかりました」
千冬「時期については追って伝える、２つ目だが…私個人の用件だ」
織斑先生は哀しそうな顔に変わった。
千冬「お前は…恨んではいないか？私と束が引き起こしたこの世界の被害者になったこと、その尻拭いをしていることに」
湊「確かに貴方達のせいで親はクズになったし虐めにもあった」
千冬「……」
湊「まぁ…簪達に会えたから悪いことだらけではなかったし、それにあんたを恨んでも仕方ないだろ白騎士さん」
千冬「…私が束を止めてればこうはならなかった」
湊「たらればの話はやめましょう、これからどうするか考えた方が楽ですよ」
白騎士を纏って日本をミサイルから守った織斑先生は立派だ、ほぼ初乗りに近い状態であの戦果は織斑先生だから出来たことだろう。
千冬「これからか…」
湊「これからです、この世界を良くするために。その為には…」

千冬「女権団か…」
湊「無人機を作るくらいまだ勢力は衰えてない…正直言って脅威です」
グレイ「あれを複数機相手にできるのは私とジャベリンくらいです、単機相手なら専用機組でもなんとかなるかもしれませんが」
湊「教師陣で戦えるのは山田先生と織斑先生くらい…、他のは一般生徒よりはマシくらいだしな」
千冬「面目ない…」
湊「あとは人を殺せるやつがどれくらいいるか…だな」
千冬「……できて私くらいだろう…私もいざやれと言われたらできるかどうか…」
湊「簡単に人を殺せる方がおかしいんで織斑先生が普通なだけです。その辺は任せて貰って構いません」
織斑先生はその後黙ってしまった。
俺は在学手続きを済ませて部屋に戻った。

＊

簪「学園に在学するの!?」

部屋に戻って学園に在学することを簪に報告した。
湊「束さんが俺に伝えずに織斑先生に言ったから俺もさっき知った、でその手続きしてきたってとこ」
簪「そっかぁ…湊と一緒にいられるんだぁ…」
簪はどこか上の空のようだ。
湊「そういや簪は何組だ？」
簪「…ごめんね湊、私４組なの…流石にそこまではお姉ちゃんでも無理だった…」
湊「あんまり生徒会長権限濫用するなよ？変な目で見られても知らないぞ？」
簪「だってぇ…」
しゅんと簪は落ち込んでしまった。
湊「飯の時と放課後、部屋でも一緒で充分だろ？それに周りの目があるしな…クラスまで一緒だと何言われるか…」
簪「あっ…そっか、それもそうだね」
湊「まぁ最悪エンタープライズの中に行けばいいし」
簪「うん」／／／
そんな感じで３日間の休日は終わった。
グレイとジャベリンはお茶を飲みながら話し合っていた。ＩＳってお茶飲めるのか

⋮。

第１０話

真耶「今日は転校生を紹介します！」

場所はＩＳ学園１年１組、２組に引き続き１組にも転校生が来たことにより１組の生徒はざわついた。織斑先生到着までしばらく続くだろう。

その時廊下では…。

「……」

???????「あはは……」

湊「空気が重い」

グレイ「ドイツの冷水と呼ばれるだけはありますね」

ドイツの転校生の放つオーラによりピリピリした空気だった。

???「えっと…初めまして、僕はシャルル・デュノア、フランスの代表候補生で３人目の男性操縦者です。君が２人目？」

湊「ああ、２人目の高見沢湊だ」

シャルル「高見沢君は何で僕達と一緒にいるの？」

湊「湊でいいよ、入学手前にストレスとかで身体崩しちゃってな…入学が今更になっ

たんだ」
シャルル「ごめんね、知らなくて…」
湊「気にしないで大丈夫だデュノア、クラスメイトにも聞かれるだろうしな」
グレイ「おそらくデュノア様に人気が流れるでしょうから大丈夫でしょう」
シャルル「僕の事はシャルルでいいよ……所でさっきから気になっていたんだけど…それは？」
肩に乗ってるグレイを指差しながら聞いてくる。
湊「こいつはグレイ、俺のＩＳだ」
シャルル「えええ!?ＩＳぅ!?」
???「……ほぅ」
これにはシャルルだけではなくドイツの転校生も反応したようだ。
グレイ「湊の日常のサポートを行うために試験的にこのような身体を与えられました。試験Ｎｏ．０１コード名グレイと申します」
ここで予め決めておいた設定を説明する。
まず、このある身体は試験的に人のサポートをどこまで出来るか？という実験の元作られたということにして、話せるのも人工的なＡＩを搭載しているということにしてある。

簪のジャベリンも同様で試験Ｎｏ．０２コード名ジャベリンということにして貰っている。今頃クラスで可愛がられてるだろうさっき可愛いって歓声聞こえたし。
因みに名前はグレイゴーストだと色々不味いのでグレイという事にしている。
この事情を知っているのは専用機組と織斑先生と山田先生と束博士とクロエだけだ。
シャルル「へぇー凄い技術力だなぁ…ここまで流暢に会話もできて思考も出来るなんて…」
???「くだらん…ＩＳは兵器だ。そのようなものは不必要だ」
ドイツの転校生が初めて口を開く。
湊「まぁ間違ってないな」
???「ほぅ…少しは話がわかるようだな」
湊「実際そうだしな…、できればそう扱って欲しくはないけど」
グレイの頭を撫でながら話す。
???「ＩＳは絶対的な力だ、他者を屈服させ蹂躙するものだ」
湊「ＩＳで力を示せばいつか身を滅ぼすぞ、女権団みたいに」
???「私はあのような弱者のようにはならん」
ドイツの冷氷…その通りだ。付け入る隙がない。
湊「所で名前は？まぁ後でわかるだろうけど」

???「ラウラだラウラ・ボーデヴィッヒ」
ラウラね、シャルルと一緒に調べとくか。
そんな話をしていると織斑先生が廊下の奥から歩いてきた。
千冬「待たせたな、とりあえずクラスを静かにさせてくる。その後呼ぶから入ってくれ」
ラウラ「はっ！わかりました教官！」
千冬「ここでは先生と生徒の立場だ、織斑先生と呼べ」
ラウラ「了解であります！」
千冬「はぁ…」
生徒の前では威厳を保ってる織斑先生でさえため息をつくとは…、ラウラ…相当やばいのでは…。
シャルル「軍人…なのかな…やっぱり」
湊「そんな雰囲気だったしな…おそらくそうなんだろう」
千冬「高見沢、デュノア、ボーデヴィッヒ入ってこい」
織斑先生から呼び出しがかかりラウラが先陣をきって入っていく、命令と勘違いしているのでは？
シャルル「僕達も行こうか…」

湊「だな」
グレイ「行きましょう」
シャルルに続いて俺も入る。
１組生徒「「「「えっ!?」」」」
ん？どうした？
グレイ「シャルル様のせいでしょう、美形の貴公子の様な男性がくれば女子校の生徒は一目惚れしてしまうでしょう」
湊「男ってことなんかスルーしてたわ…あーそういうこ「「「「きゃーーーー／／／／／／／／」」」」
まさにソニックウェーブともいうべき波動が俺を襲った、隣のシャルルもびっくりしてフラフラしている。
千冬「静かにしろ！グラウンドを走らされたいか!!」
織斑先生の一喝によりすぐに静かになる教室、流石です。
千冬「高見沢から自己紹介しろ」
そして飛んでくるキラーパス、というか…緊張してきた…。
湊「えと…２人目の男性操縦者の高見沢湊です。入学前に体調を崩してしまったので今更の入学になりましたがこれからよろしくお願いします。それと、こいつはグレイ、

俺の専用機でＩＳの実験の一環でこのような形の待機形態になっています」

グレイ「紹介に預かりました、試験Ｎｏ．０１コード名グレイと申します。同じく４組のジャベリンと同じコンセプトで作られております。因みにこの声はＡＩによる会話による自動翻訳音声となっておりますので悪しからず」

グレイが直接頭に文章を送ってくれたのでなんとかなった。ありがとうグレイ。

その後はシャルルが自己紹介をし、嵐が起き、その後ラウラを自己紹介をした。ただ…。

ラウラ「貴様が!!」

ラウラが一夏を平手打ちしたのは驚いたけどな。

＊

朝のホームルームが終わり1限目の少し前、1組と2組の合同実習が行われるグラウンドに来ている。一夏とシャルルが女子生徒を引き付けてくれたので楽々と来れた。

???「ねーねータカミー」

さて少し時間があるからラウラとシャルルのことを調べるか…。

???「タカミーってばーー!!」

湊「耳元で騒ぐな誰だ！」
???「やっと気づいてくれた～」
え？マジで誰？赤みがかかった髪で巨乳でポヤポヤした子なんか知らないぞ？
湊「どちら様でしょうか…？」
???「わたし～？布仏本音だよ～かんちゃんの従者～」
湊「布仏…虚さんの妹か、簪にもいたんだな」
本音「うん！あの時は会えなかったからしっかり挨拶しときたくて～」
湊「すぐに出て行っちゃったからな…、よろしくね本音さん」
本音「本音でいいのだ～タカミー」
グレイ「あだ名が増えましたね」
湊「まぁ変ではないしいいだろう」
本音「他にあだ名があるの～？」
湊「みっくんってのがあるが…」
本音「うーん…タカミーがいい！」
湊「任せるよ本音」
その後遅れてきた一夏とシャルルが合流した後授業が開始された。

＊

湊「で、なんでこうなった」

グレイ『なんででしょう？』

俺はセーフティモード（束が新しく搭載したグレイゴーストにリミッターをかけた状態）でみんなから少し離れた上空に浮遊している。

グレイゴーストは肩を含めた腕全部と膝から下とバックパックだけを装着した普通のＩＳっぽい見た目で右手に剣、左手にロングライフルを展開し、バックパックのブラスター２基に追加装備として脚部にミサイルポッドが追加された状態である。

千冬「入学試験の実技テスト代わりだ、担当も山田先生だったしお前の実力を見せとくのに丁度いいからな」

湊「だからって急すぎませんか？」

千冬「さっき思いついた」

真耶「織斑先生!!そういうのはやめて下さい!!」

見せ物か。

ラウラ「……」

ラウラはラウラで戦いを見ようとしてるし…。

一夏、セシリア、鈴、シャルル「ジーーー」
専用機組も興味津々だし…。
１組２組生徒「ワクワク」
味方がいねぇ…。
千冬「味方はいないぞ諦めろ、ルールはシールドエネルギーが先に半分を下回ったら負けとする」
湊「了解しました、グレイ行くぞ」
グレイ『リンケージで？』
湊「勿論だ、山田真耶…銃央矛塵（キリング・シールド）の二つ名を持つ織斑先生に次ぐ実力者だからな！」
真耶「か、過去の事には触れないでくださーい!!!!」／／／／
山田先生的は恥ずかしい過去なのだそうだが実力があるのは確か、機体スペックを同じくらいまで下げてあるから勝敗を決めるのは操縦者のテクニック、なら手を抜くなんて出来ないか。
湊、グレイ「『リンケージ』」
今回は前回の様にリンケージできないということはなくしっかりグレイと繋がれた。
グレイ『同調率安定…問題ありません』

湊「準備完了です」
真耶「同じく」
千冬「双方準備は整ったな？では…模擬戦開始!!」
その合図とともに俺と山田さんは同時にロングライフルとアサルトライフルを放った。
それは双方にも当たらず横への加速で避けられるそしてお互いに回避を読んでの偏差射撃も行っていた。
それもお互いに避ける、偏差射撃を更に予測しその一手一手に対応していく。読み負ければ即被弾、そこから負け筋に繋がる高度な戦いそんな戦いが1組生徒の前で繰り広げられた。まだ戦いが始まって1分も経ってないのにである。
1組2組生徒「何…あれ…？」「国家代表クラスの動き…」
一夏「すげー！すげーな湊！」
セシリア「いいえ…おそらくまだ全開ではありません…」
鈴「お互い射撃武器は持っていたもののみ使ってる…まだギアが上がるわよ」
箒「これ以上にだと!?」
シャルル「グレイのスペックは詳しく知らないけど山田先生はラファールの機体性能を上手く…いや完璧に引き出してる」

千冬「当然だな、山田先生は現役時代私と唯一張り合えた操縦者だからな」
一夏「千冬姉が!?アダっ!!」バシンッ
千冬「織斑先生だ、負けはしなかったが隙を見せれば食われるそんな存在だ」
鈴「じゃあなんでみんな知らないんですか？」
千冬「それはな…」
一同「それは？」
千冬「極度のあがり症なんだ…山田先生は…」
一同「あー…」
千冬「訓練や模擬戦などでは強いのだが…本番となると途端に凡ミスをしてな…」
セシリア「それでは何故今は動けてるのでしょうか？模擬戦とはいえあがり症であればそうなる状況だと思いますが…」
セシリアの言う通り、そうなってしまってもおかしくない状況のはずなのに機体を縦横無尽に動かしトップレベルの戦いをしている。
千冬「高見沢のせいだな」
シャルル「湊の？」
千冬「最初の一射と次の偏差射撃で本気を出さないと勝てないと悟ったのだろう、あがり症を忘れるくらいに」

一夏「すげぇ…」
そして試合は動いた。
湊、真耶「つっ!!」
お互いに被弾したのだ。ただし湊はアサルトライフルの一発が足に当たり、山田先生はロングライフルのビームをシールドで防ぎきれずに漏れ出たのが被弾、お互いに極小威力であり数%シールドエネルギーが減ったのみである。
何故被弾したのか?それは2人は射撃戦をしながら距離を詰めていたのだ今１００m以上離れていた距離が５０ｍも無いくらいになっている。
グレイ『セーフティモードではこの反応速度が限度です、これ以上は捌き切れません』
湊「剣がある!」
直撃弾を正確にガードし被弾を減らす。それでも少しずつ被弾はしていく。
真耶「こんな凄いだなんて…流石は灰色の亡霊ですね!!」
山田先生も負けておらず恐ろしい正確さでビームを捌く。
そして2人の距離は更に近づき遂に…。
湊「はぁ…はぁ…」
真耶「はぁ…素晴らしいですね…高見沢君」
2人は互いにロングライフルをアサルトライフルを突きつけていた。

互いのシールドエネルギーは６０％前後、直撃なら半分を下回る。
真耶「どうしました？撃てば勝ちですよ？」
湊「山田先生こそ…」
しかし２人は撃たない…否、撃てない。
弾切れだ。
そして２人は同時に動き出した。
湊は持ってた剣を上段から振るい、山田先生はいつの間にか展開してたブレードを下段から振るう。
ガキインッ
二つは火花を散らしながらつば競り合う、そしてその拮抗を破ったのは…。
湊「グレイ！」
グレイ『ミサイル！』
真耶「!!」
脚部のミサイルを発射し…。
真耶「読んでます!!」
寸前のところでその場で回る様につば競り合いをやめ、湊を前に体制を崩す。勿論脚部のミサイルも発射が安定せず山田先生の下を通過してしまう。

真耶「貰いました！」
アサルトライフルはとうに捨ててあり既にショットガンを呼び出していた。ショットガンを振り向きざまに湊は向ける。
真耶「え？」
そこに湊はいなかった、いやいる。咄嗟に山田先生は上を見上げた。
湊「俺も読んでた!!」
目に映ったのは右足のかかとだった。
ミサイルを打つ瞬間足のＰＩＣを解除、ミサイルを撃った反動で身体を回転しそのままかかと落としをしたのだ。
真耶「きゃああぁぁぁぁぁ!!!」
右肩に直撃し落とされる。だがシールドエネルギーは半分をきってない。
湊「ブラスター！」
バックパックのブラスターを脇の下から回し展開。発射。
山田先生はバランスが崩れてるにも関わらず回避行動を行い１つは避けたがもう片方が足に直撃した。
千冬「そこまで！２人とも素晴らしい戦いだった！惜しくも負けてしまったが山田先生の実力がわかったはずだ。あまり教師を舐めすぎない様に、いいな！」

一同「はい!!」
湊「なるほどね、山田先生の為でもあったわけか」
真耶「うう…負けてしまいました…」
グレイ『今まで戦った誰よりもお強い方でした』
湊「流石は銃央矛塵ですね」
真耶「やめてくださーい!!」
こうして模擬戦は終わり、合同授業のＩＳの装着訓練では模擬戦に触発されたのか気合の入った生徒ばかりでスムーズに終わった。

箒「強い…あれほどの力があれば…一夏は私を見てくれるだろうか…？」

ラウラ「高見沢湊…なるほど……奴が…」

第１１話

ラウラ「高見沢、少し付き合え」
合同授業の後ラウラからのお誘いを受けていた。
湊「すぐ済む話か？」
ラウラ「ああ」
グレイ「ですが今から着替えもあるとなるとそんなに時間がないのでは？次の授業の後がいいかと」
湊「それもそうだな、ボーデヴィッヒもそれでいいか？」
ラウラ「構わん、場所は…屋上でいいだろう」
湊「了解した」
その後、次の授業を終え俺とラウラは屋上で対話していた。
湊「で、話って？」
ラウラ「貴様は灰色の亡霊だな？」
湊「やっぱバレたか…」
グレイ「あそこまでやれば仕方がありません」

ラウラ「否定しないのだな」
湊「そこまで言うからには確証があるんだろ？」
ラウラ「当然だ、軍の資料で記録されてる戦闘は全て目を通している。資料通りの強さだったからな」
湊「流石軍人さんだ、あまり記録には残らない様にしてたんだがな」
ラウラ「映像としては荒いものばかりで数も少なく時間も短いものだったがな」
おそらく超遠距離からの撮影そのまま持ち帰ったから束にも見つからなかったのだろう。
湊「で、どうするつもりなの？」
ラウラ「我が祖国…ドイツに来てもらう」
湊「断ります」
ラウラからの勧誘をすぐに頭を下げて断った。
ラウラ「何故だ」
湊「俺が女権団を潰して回ってるの知ってるでしょ？」
ラウラ「勿論だ、我が祖国にも潜伏していた女権団を潰してくれたことは感謝している」
湊「軍属になったら自由に動けないでしょ？そういうこと」

ラウラ「だが、女権団はもういないはずだ」
湊「それがいるんだよ、まだ相当戦力を残してる」
ラウラ「それが貴様がここにいる理由か」
湊「そ、襲撃に備えてる」
ラウラ「そうか…事情はわかった。女権団との戦いが終わったらまたその時に聞く」
湊「そん時の状況によりけりかな、考えとくよ」
そう言ってラウラは屋上から出ていった。
湊「グレイ、ラウラに関して分かったか？」
グレイ「それが…レーゲンのコアが反応してくれないのです」
湊「反応しない？」
グレイ「普段なら反応して開示したくないものはわからないといった反応なのですが…今回は反応すらしてくれませんでした。コアネットワークから隔離されてるとは違いますが…」
湊「つまりネットワーク上にはあるが隔離されてるかの如く反応しない…と」
グレイ「はい」
湊「要注意だな…」
不穏な空気の中次の授業のために教室へ戻った。

＊

簪「そんなことがあったの？」
湊「心配するに越したことはないからな、一応簪も注意しといてくれ」
簪「うん、わかった」
本音「わかったー」
湊「何故ナチュラルに本音がいるのか」
授業が終わりお昼、食堂で簪と本音と昼ご飯を食べていた。
簪「本音のことは気にしないで、湊が来るまではよく一緒に食べてたし本音と虚さんは事情を知ってるから気にしないでいいよ」
湊「つまり楯無さんもか」
簪「うん、お姉ちゃんも知ってる。それと夏休み前くらいには学園に帰ってくるって」
グレイ「霧纏の淑女の整備とロシア代表の仕事と更識の仕事、ギリギリ終わると言った感じですね」
湊「無茶してそうだなぁ…」
ジャベリン「でも楯無様なら何食わぬ顔で終わらせてそうですよね」

全くもってその通りである。
本音「じー…」
湊「……食べたいの？」
本音が俺の海老の天ぷらをじっと見つめている。
因みに和風定食に追加で天ぷらの盛り合わせとレバニラ炒めを頼んだ足りないと思ったからだ。
簪も和風定食、本音はデラックスパフェ、大盛りのパフェを食ってるのに天ぷらに目がいくとは…。
本音「食べたい!!」
簪「本音にはそれがあるでしょ…パフェと天ぷらは合わないよ…」
ジャベリン「そもそも他人のものを欲しがるのは良くないですよー」
はぁ…とため息を吐きながら注意する簪、まぁ…気持ちはわかる。
簪「それにしてもよく食べるね、そんなに美味しい？」
湊「ああ、ほんと美味しいよ。こんな美味しいご飯食べたの初めてだよ」
本音「初めて…？」
湊「うん」
簪「篠ノ之博士といたときは？」

湊「東特製の栄養剤とかサプリメントばっか」
グレイ「物心つく頃には母親がいませんでしたからその後はこんな見事な料理は食べた記憶がない様です」
ジャベリン「なんか冷めたレトルトとかばかりみたいですよ」
グレイの一言で簪と本音が固まってしまった。
簪と本音は互いに見合った後…。
簪「ほら湊私の鮭の塩焼きあげるよ?」
湊「いやそれ俺のにもあるから…」
本音「うう…タカミーこれあげるぅ」
湊「カントリーマアム…」
量もあるので2人の好意には詫びを入れて断った。流石に申し訳ないからな。
ただ簪は納得いかない様で定期的に何か作ってくれるということになって落ち着いた。
カントリーマアムは貰った。

＊

放課後一夏達に誘われて共に第３アリーナに集まり一夏の訓練などを行なっていた。
箒「そこはこうダンっと踏み込んでズバーンと斬るんだ！」
鈴「そこはもう感覚よ感覚！」
セシリア「右足は後方に１２。引き、相手の動きに合わせて左に２ｍ移動するのですわ！」
一夏「分かりづれぇ…」
とまぁこんな感じに擬音パレード、感覚派ニュータイプ、セシペディア先生と完全に別れており分かりづらい状況となっている。
湊「まだセシリアが分かりやすいが…」
簪「基本を覚えてない織斑君だとわからないと思う…」
シャルル「箒と鈴は僕でもダメだよ…」
こんな感じで３人で苦笑いしながら見ていた。
シャルル「仕方ない、僕一夏に教えてくるよ」
湊「ありがとうシャルル、こっちもやることあったから助かるよ」
シャルル「気にしないでー！」
シャルルはそう言って一夏の元へ向かっていった。一夏もシャルルを見てほっとした様だ。

簪「やることって何？」
湊「簪とジャベリンのリンケージの練習だ」
簪「リンケージ？」
湊「俺とグレイがいつもしていることだ、これができれば倍以上の実力を発揮できる」
簪「山田先生と激戦を繰り広げたあの動きができるの？」
湊「なんで知ってるの…？」
ジャベリン「私がグレイ経由で簪に見せました！」
グレイ「参考になるかと思い提供しました」
なるほどそれなら話は早い。
湊「そう、あの動きも可能だ。あれは自分のＩＳと一体化させ処理速度を上げて行動の予測や反応速度を限界まであげる技だ。ＩＳと対話、つまり自分の専用機と相性が最高までいくとできるって束は言ってた。それこそが束の望んだＩＳの形でもあるらしい」
簪「そっか…私お姉ちゃんも出来ないことが出来るんだ…」
ジャベリン「楯無様は出来なくても強い人だけどね、でもこれを物にすれば超えられるよ簪！」
簪「うん！それに行動予測…ゼロシステム…！」

湊「うん…まぁそういう解釈で間違ってない…かな…？」
グレイ「その例えで大丈夫ですよ、知っている物で例える…一番覚えやすいやり方です」
湊「よし、そうと決まれば早速やるぞ」
簪、ジャベリン「「はい！」」
そうして俺と簪はセーフティモードで展開し少し高めの上空で向かい合う。
湊「まずお手本だ」
湊、グレイ「『リンケージ』」
リンケージを行い簪の前まで移動する。
簪「それがリンケージ？」
湊「そ見た目は変わらなくてもしっかり性能は上がってる、試してみる？」
そう言って簪から７０ｍほど離れて待機する。
湊「落とすつもりで撃ってみ」
簪「でも…」
ジャベリン『大丈夫だよ、しっかり避けれるから安心して』
簪「うんわかった」
そう言って簪は両腕のツインガトリングを撃つ、それを湊は弾幕の量が４倍近く増え

てるにもかかわらずヒラリヒラリと避けていく。
簪「すごい…」
湊「普通のＩＳ乗りなら反応が遅れるんだけどリンケージをすればこんな感じに思い通りに動けるようになる」
簪「すごいよ湊！」
ジャベリン『これから簪もするんだよ？』
簪「それでもだよ」
湊「じゃあやってみよっか」
簪「うん」
簪は目を閉じて集中する、そこに俺はやり方を説明する。
湊「まずジャベリンを感じるんだ機体ではなくコアの方」
簪「コアの方…」
簪の表情が険しくなる。
湊「力む必要はない、ジャベリンに話しかけてみて」
簪「ジャベリン…？」
ジャベリン『大丈夫、簪なら出来るよ』
簪「ジャベリン…ありがとう、力貸してくれる？」

ジャベリン『もちろんだよ！』
簪の表情が楽になるジャベリンをしっかり認識できた様だ。
グレイ『簪とジャベリンとの繋がりがより強くなりました、充分ですね』
湊「そうしたら展開したジャベリン自体を自分の手足、身体だと思うんだ」
簪「手足…身体…」
湊「そして最後に脳とジャベリンのコアを繋ぐ、その解除コードがリンケージだ」
簪「行くよ…ジャベリン」
ジャベリン『了解！』
簪、ジャベリン「『リンケージ』」
そうして簪とジャベリンのリンケージは成功した。
湊「成功だな」
グレイ『おめでとうございます、簪様、ジャベリン』
簪「でき…た？」
ジャベリン『おめでとう簪！出来たんだよ私達！』
湊「じゃあひとっ飛びしますか」
簪「うん！」
俺と簪はアリーナの空中を縦横無尽に飛び回った。

個別瞬間加速を試したり、無茶な反転軌道を試してみたりしてリンケージを慣らした。
地上に降りるとアリーナの他の生徒と一夏達が呆気にとられた顔をしていた。
一夏「更識さんもとんでもねぇな…」
鈴「こりゃすんごいわね…」
セシリア「湊さんだけでなく簪さんまでも…」
シャルル「えぇー…」
なんかごめんね…。
ラウラ「織斑一夏」
その時アリーナにラウラの声が響き渡った。
一夏「なんだよ」
ラウラ「私と戦え」
一夏「断る、戦う理由がねぇよ」
ラウラ「なら理由を作ってやる」
ラウラはそういうと大型レールカノンを一夏に向けて発射した。
が、直撃すると思われた弾は湊の放ったロングライフルのビームで破壊された。
湊「ラウラ、どういうつもりだ」

ラウラ「邪魔をするな、用があるのは織斑一夏だ」
湊「なら他のやつを巻き込むな」
ラウラ「他のやつ？巻き込まれる方が悪い、強者ならば巻き込まれることなどないからな」
湊「そうか…やるぞグレイ」
グレイ『了解』
他のやつの中には簪がいる、なら容赦はしない。
俺はラウラに向かって飛び出した。
ラウラ「貴様に用はない！」
湊「俺は今用ができた!!」
レールカノンの砲撃は発射直後に弾を破壊し、ワイヤーブレードは直撃直前に瞬間加速してかわす。
そしてそろそろ近接の間合いに入る時…。
ラウラ「ちっ、止まれぇ！」
ラウラが右手を突き出してきた。
湊「遅い」
それをロングライフルで弾く。

ラウラ「なっ！ぐあぁ!!」
そのままの勢いで腹にキックをおみまいし足で腹を踏みつけて押さえつけ顔面に大型ブラスターを向ける。
湊「二度と簪を巻き込むな」
ラウラ「…何？」
湊「簪を巻き込むな」
一瞬ラウラは訳がわからないと言った顔をしたが理解したのかいつもの調子に戻った。
ラウラ「なるほど、あの水色髪の女が巻き込まれそうになったから私に向かってきたのか」
湊「悪いか」
ラウラ「私にとっての教官のように、お前にとっての教官のような存在だということなのだな」
湊「そうだ」
グレイ『すみません、簪様が絡むとこんな感じで…』
ラウラ「なら次はそうしないようにしよう」
湊「お互いの同意の元やり過ぎない程度であれば俺は見逃す、そうしてくれ」

ラウラ「了解した」
そういうとラウラはＩＳを解除しピットの方へと歩いていった。
俺は一夏達の元へ戻った。
湊「悪かったな先走って」
一夏「いや…俺はいいんだけどさ」
シャルル「やっぱり凄い技術だね湊」
湊「シャルルもありがとな、一夏のカバーに入ってただろ」
シャルル「え!?あっうん」
湊「あの状況で咄嗟に動けたシャルルも大したもんだよ」
そう言ってシャルルに手を差し出す。
シャルル「ありがとう湊」
シャルルは出された手を握り返し握手をした。

＊

湊「データは取れた？」
グレイ「バッチリです」

エンタープライズの中で接触した時に取得したシャルルのデータを見ていた。
湊「性別偽装、戸籍偽装、デュノア社の現状…ひでぇなこりゃ」
グレイ「真っ暗ですねぇ」
シャルルはシャルロット・デュノアという女性で社長の娘ではなくマリアという社長の愛人の娘ということと、デュノア社は女権団の隠れアジトということもラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡが教えてくれた、ラファール的にもなんとかしてあげたいのだろう。
湊「レーゲンはやっぱダメだったな」
接触でも反応せず情報が得られなかった。
武装自体はコアネットワーク上から拾えたので対処できたが女権団からの刺客かどうかわからない始末だった。
グレイ「それでもわかったことがあります」
湊「なにがだ？」
グレイ「コアは反応してくれています、ですが謎の力によって無理やり押さえつけられている感じでした」
湊「謎の力？」
調べることがまた一つ増えたようだ。

湊「こりゃフランスとドイツに直接行かなきゃいけないな」
久しぶりにグレイゴーストとして動く時がきたようである。